

2021年 3月 国際放送番組審議会

2021年3月のNHK国際放送番組審議会（第678回）は16日（火）NHK放送センター（ウェブ会議）で11人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、「3/11 - The Tsunami: The First 3 Days」、「Flowers Will Bloom Beyond Borders」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	河合祥一郎	(東京大学大学院総合文化研究科 教授)
副委員長	河野 雅治	(日本国政府代表・中東和平担当特使)
委員	岡田 亜弥	(名古屋大学大学院国際開発研究科 教授)
委員	鎌田由美子	(株 ONE・GLOCAL 代表取締役、クリエイティブ・ディレクター)
委員	阪田 恭代	(神田外語大学外国語学部 教授)
委員	佐藤可土和	(クリエイティブディレクター、株サムライ 代表取締役)
委員	佐藤たまき	(古生物学者、東京学芸大学教育学部 准教授)
委員	田中浩一郎	(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授 (一財)日本エネルギー経済研究所 参与)
委員	中曾 宏	(株大和総研 理事長)
委員	平子 裕志	(全日本空輸(株) 代表取締役社長)
委員	村上由美子	(経済協力開発機構 (OECD) 東京センター 所長)

(主な発言)

< 「3/11 - The Tsunami: The First 3 Days」 (3月6日 (土) 8:10 ほか)

「Flowers Will Bloom Beyond Borders」 (2月11日 (木) 0:30 ほか) について >

○ 「3/11 - The Tsunami: The First 3 Days」は、NHKが集めた当時の映像をナレーションなしでそのまま見せることで、大自然の圧倒的な力を感じさせる、強いメッセージになったと思う。また、日本語が理解できない外国人がこの惨事に遭遇し、情報が得られなければ、どれだけ不安になるか、容易に想像がついた。改めて、国際放送の、英語および多言語による発信や取り組みに大きな意味があると感じた。

一方、「Flowers Will Bloom Beyond Borders」を見て、未来に向けて明るく光が射すような印象を受けた。日本語を話す外国の音楽家たち、震災を経験した在留外国人の思いなどが共有されている点がよかった。

○ 「3/11 - The Tsunami: The First 3 Days」は、集めた映像の量と種類が圧

倒的で、非常にインパクトの強い番組だった。映像を時系列で編集し、ナレーションなしの構成としたことにより訴える力が増し、また、視聴者がそれぞれで受け止めることを促す効果を生んでいると思う。震災がいかにか突然やって来て、日常を破壊し尽くすのか、大津波の破壊力がどれだけすさまじいか、そして被災地で救助にあたった人たちの懸命な活動と現場力のすごさ、いずれも映像から強く伝わってきた。震災の記録を次世代に伝えて世界と共有するという役割を十分に果たす番組だ。ただ、海外の視聴者向けには、震源地や福島第一原子力発電所と東京など、各主要都市との距離、地震に関するデータや震源の深さなどを、もう少し加えた方が記録としてよりよいものになると思った。

「Flowers Will Bloom Beyond Borders」を視聴して、2012年にできた復興支援ソング「花は咲く」が、亡くなった人々から託された思いを受け継ぎ、未来に向けて強く、希望を持って生きて行くことをテーマにした歌として制作された経緯がよく理解できた。また、歌に込められた人々の思いが、10年経過した今も変わらずに歌い継がれていることを心強く思った。11人の歌手による11言語の歌が1曲にうまく編集され、旋律もきれいに流れていたのが印象的だった。見終わって温かなぬくもりが残る番組だ。

- 「3/11 - The Tsunami: The First 3 Days」は、ナレーションなしで映像のみで伝えるという手法で、迫力があつた。一方で、海外視聴者に伝えたい点、記憶に残して欲しい点がきちんと届いたかどうか、疑問を持った。文字による情報はシンプルな説明に徹していたが、教訓となるキーワードを加えるなど、もう少し丁寧に制作者の意図を伝えてもよかつたのではないかと。

「Flowers Will Bloom Beyond Borders」は、東日本大震災後の海外からの支援への感謝や、日本と世界をつなげるメッセージもあり、癒しと希望、ぬくもりが伝わる、すばらしい番組だ。海外アーティストと共に作っているところもよい。ただ、当時多くの支援をした国々を考えると、例えば韓国や台湾などのアーティストが入っていなかったのは残念だ。また、「花は咲く」の作詞家、歌手などについて、もう少し解説が欲しかった。さらに、職場でインタビューをした際、出演者の名札が映っていたのが気になった。個人情報保護の観点からは、読める状態にしない方がよいのではないかと。

- まず「3/11 - The Tsunami: The First 3 Days」だが、3月11日のサーフィン、卒業式、運動会といったのどかなシーンと、その後起きた惨劇、パニックの対比に強い印象を受けた。津波のシーンを見るのは初めてという海外視聴者向けにも、最初に津波などの映像を流すお断りを画面に表示したのは、配慮されていてよかつた。ただ、日本政府の関与や対応に関するシーンが少ないと感じた。こうした自然災害に対して、政府がどのように対処しているのかは関心のあることだと思つたので、この点についてももう少し時間を割いてほしかつた。この番組が伝えたかつたのは、自然災害によるリアルなパニックや恐怖に加え、自然災害に対して人がいかにか無力であるかということだつたのではないかと。生き延びるためにどんな準備が必要なのかを世界に伝える意味でも国際放送で発信できてよかつた。

「Flowers Will Bloom Beyond Borders」は、15分という短い時間の中に多

くのメッセージが詰まっている番組だ。世界中の歌手が地震災害に対するメッセージを伝えていたことや、自国語で歌うことに込めた気持ちを話した部分が印象に残った。歌手の言葉により、番組のメッセージに厚みが増したと思う。

- 「3/11 - The Tsunami: The First 3 Days」は、緊迫した映像の連続にほとんど息もつかずに見た。リアルな映像に胸が詰まる思いで、これだけの映像がよく残っていたという印象を持った。ナレーションなしで映像だけでつないでいく手法が効果的で、インパクトをもたらしていると感じた。最後に、被災者の方々の今、伝えたい言葉が紹介されるが、甘く考えず、高く、遠くに逃げることに、津波の犠牲者をゼロにしていかななくてはという思い、失った人を忘れることはない、というような言葉が、海外の視聴者には、メッセージとして特に重要だったと思う。また、海外の方々は非常に早い時点から支援を開始したと記憶しているが、最初の3日間の時系列の中で、ほとんど言及がなかった。支援をしてくれた国の方々も数多く視聴していることを考えると、もう少し海外からの支援についての言及があってもよかった。

「Flowers Will Bloom Beyond Borders」は、音楽が世界をつなぎ、人を癒し希望を与える力を持つことを伝えるすばらしい番組だ。紛争下にあるシリアで、教師が生徒たちに日本語でこの歌を教え、歌い継いでいるとの紹介もあり、多くの人たちに勇気を与えていることに感動した。番組の冒頭に短く日本語バージョンの紹介があったが、学校で子どもたちが「花は咲く」を日本語で歌っている様子なども加え、もう少し長く紹介できればよかったのではないかな。

- 「3/11 - The Tsunami: The First 3 Days」は、第一級のドキュメンタリーだと感動した。津波という巨大な自然の力に対し、いかに人間が無力かを思い知らされ、特に、工場などの大きな建物や車が流される場面や目に見えない脅威を生んだ福島第一原子力発電所の事故を振り返ることで、人間の存在の小ささを強く感じた。ナレーションが一切なく、震災発生から3日間で生々しく現場で語られた音声、すべてをつないでいるが、この現場の音声こそが、ドキュメンタリーに迫力を与えたと思う。2001年のアメリカでの同時多発テロの際、ナレーションなしで映像を見せたドキュメンタリー番組に強い衝撃を感じたが、同じように感慨深かった。また、大混乱の中でも秩序正しい行動を取り、支援に対する感謝の気持ちを示すなど、日本人らしい気質が見えたことにも心を打たれた。

「Flowers Will Bloom Beyond Borders」について、11の言語で歌手が共に歌ったことにより、国境を越えた国際社会の共感が体現できていることが、この番組のすばらしさだと思った。

- 「3/11 - The Tsunami: The First 3 Days」は、ナレーションなしで映像をそのまま時系列で見せるシンプルな構成がすばらしく、映像の力にショックを受けた。震災関連番組では、事前に、これから流れる映像についてのお知らせが出るが、これまでは、実際にショックを受けることはなかった。今回、初めて、映像を見て本当に胸がドキドキし、当時の恐怖がよみがえった。映像の中で津波から逃げる人々を見て、実際に脅威が迫っているにもかかわらず、自分は大丈夫だと感じ、その場から急いで去れないこともあるなど、実際の映像が語る現実を体験した。実録映像の強さを体

現した番組だ。視聴者には恐怖をはじめ、さまざまな受け止めが残ると思うが、今後の教訓となる記憶に残してほしいメッセージを最後に入れたほうが丁寧でよかったのではないか。

「Flowers Will Bloom Beyond Borders」は、NHKならではの企画で、音楽の力を使った非常にメッセージ性の強い番組になっていた。現在、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で世界が分断されるなどさまざまな課題がある中、世界をつなぎ、前向きになれる企画を考え続けて欲しい。

- 「3/11 - The Tsunami: The First 3 Days」は、いつもの日常が突然失われていく衝撃や、混乱の中でも救助活動にあたる人々や被災者どうしの思いやりへの感動など、さまざまなことを考えさせられる番組だった。インドネシアなど、自然災害の発生状況が日本と似ている国では、防災教育の観点からも、このような災害に関するドキュメンタリーを見てもらえる機会があればよいと感じた。

「Flowers Will Bloom Beyond Borders」は、さまざまな言語で歌をつなぐことで、感情を揺さぶる構成になっていた。海外からこれまでもさまざまな支援を受け、今でも気にかけてくれる方は多いが、この番組で、それらの人々と、経験や気持ちを共有できる機会が持てたことはすばらしい。

- 「3/11 - The Tsunami: The First 3 Days」は、初めて見る映像も多く、淡々と記録映像をつないで伝えることで、当時の恐怖などがよみがえり、迫力を感じた。また、福島第一原子力発電所や、東京の渋滞や帰宅困難者などの様子など、3日間の多方面からの映像がバランス良く入っていた点もよかった。東京で停電が発生した際の映像がなかったが、個人的には強く印象に残っているので、入れてもよかったのではと思う。また、番組を見て、私たちは10年間で何を学び、何を改善できたのか、と振り返るきっかけにもなった。それぞれに10年の重みを問いかけるメッセージがあってもよかったと思う。

「Flowers Will Bloom Beyond Borders」は「花は咲く」を知らなくても心にしみる内容で、歌の力に改めて感銘を受けた。「花は咲く」を日本語や韓国語などで聴かせるパートもあるとさらによかった。

- 「3/11 - The Tsunami: The First 3 Days」を視聴して、何度も見た映像も、新たな編集で改めて衝撃を感じた。ナレーションはなかったが、むしろ発信するメッセージは強かった。海外の視聴者は、人々が発する音声を聞き、悲惨な状況でも感情的にならず、冷静に対処しようとする声、感謝や思いやりの声などに驚きをもったと思う。日本人の忍耐強さ、個人より周囲を気にかける特性が自然に前向きに理解されたのでは、と思う。

「Flowers Will Bloom Beyond Borders」は、短い番組ではあったが、構成もよく心に届く番組だった。東日本大震災のような、厳しい状況の中でも一筋の希望を見出し、そこから新しい明るい将来を築いて行こうという気持ちを応援する歌だ。震災にとどまらず、新型コロナウイルスの感染が拡大する中でも、音楽や芸術の力が人間の心の傷を癒す可能性がある、という、重要なメッセージをうまく伝えていた。

○ 「3/11 - The Tsunami: The First 3 Days」は、今まで何度も見てきた映像が多かったが、構成の力によって、初めて、その場に自分がいたらという感覚で見ることができた。津波が来るといふ警告や警報を聞いて、分かってはいても逃げるところまでいかない、という状況も大いにあり得ることだと思った。高いところまで逃げなければいけないという切羽詰まった状況になっていなかった人も、そのような現実が、このドキュメンタリー番組の一番の教訓であり、メッセージだと思う。家族で話し合っ、津波が来た場合のことを決めておくべきだった、という後悔を聞き、身につまされた。自分の身において考えさせる、すばらしいドキュメンタリー番組だ。

「Flowers Will Bloom Beyond Borders」は、さまざまな言語で歌うことで、言語の魅力を見せてくれた。言語の響きを歌手が魅力的に伝えており、各国や言語への興味もわいてくる。視聴者に、そうした興味を持ってもらえれば、お互いへの関心を深められ、国際放送の、全世界に向けての発信の目的がいっそう果たされると感じた。

(NHK側) 「3/11 - The Tsunami: The First 3 Days」について、この10年間、NHKで多くの震災番組が放送され、国際放送でも発信してきたが、東日本大震災について全く知らない外国人の方、震災後に生まれて来た子どもたちに、津波の恐ろしさを短い時間できちんと伝える番組を作りたいという目的で企画した。震災当初3日間の映像だけで作ることで、被災地で、実際に震災を経験するかのような番組にしたいと考え、時系列にまとめ、被災地にいる方がそこで何を体験したのか、解説を最小限にして制作した。集めた映像は、およそ300時間で、その中から試行錯誤を繰り返して映像を選んだ。被災地の生々しい声が入った、眼前に津波が迫るかのような震災の映像を中心に選んだため、最終的に今回の番組となった。

(NHK側) 今回、震災から10年がたち、新型コロナウイルスに翻弄された1年を経て、世界中に孤立感や閉塞感が漂う中で、「花は咲く」をより多くの言語で作ってみたいと考えた。「パンデミック」もある意味で災害であり、この曲のテーマである、希望や前を向く気持ちを世界に届けようと企画した。

出演者については、なるべく多様な地域、性別、歌のジャンルを実現し、続けて聴いたときに1つにまとまるよう、キャスティングは熟考を重ねた。今回出演いただいた11言語の歌手の方以外にも、ほかの言語で歌われる歌手の方で、何人か候補がいたが、スケジュールが合わないなどの理由で、結果的に入らなかった。もし次回があれば、検討していきたい。

日本語の歌もあったほうがよかったとの指摘については、今回、国際放送なので、英語メインで番組を制作し、また、日本語以外の言語での番組制作を目指す点から、あえて外国語の歌だけで制作した。

(NHK側) 出演者の名札について、撮影時に名前も含めて紹介することに同意いただいております。画面上でも名前を表示しているため、個人情報の扱いについては問題ないが、名札は必ずしも着用する必要はなかったかもしれない。

今後、状況に応じて判断していきたい。

2021年 2月 国際放送番組審議会

2021年2月のNHK国際放送番組審議会（第677回）は16日（火）NHK放送センター（ウェブ会議）で10人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。その後、新型コロナウイルス関連 在留外国人向け情報発信強化について説明があり、意見交換を行った。ひき続き、「GLOBAL AGENDA」「DEEPER LOOK from New York」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

(出席委員)

副委員長	河野 雅治	(日本国政府代表・中東和平担当特使)
委員	岡田 亜弥	(名古屋大学大学院国際開発研究科 教授)
委員	鎌田由美子	(株 ONE・GLOCAL 代表取締役、クリエイティブ・ディレクター)
委員	阪田 恭代	(神田外語大学外国語学部 教授)
委員	佐藤可土和	(クリエイティブディレクター、株サムライ 代表取締役)
委員	佐藤たまき	(古生物学者、東京学芸大学教育学部 准教授)
委員	田中浩一郎	(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授 (一財)日本エネルギー経済研究所 参与)
委員	中曾 宏	(株大和総研 理事長)
委員	平子 裕志	(全日本空輸(株) 代表取締役社長)
委員	村上由美子	(経済協力開発機構 (OECD) 東京センター 所長)

(主な発言)

<最近の国際放送の動きについて>

- ミャンマーの情勢について、NHKでは、アウン・サン・スー・チー氏が率いる政党 NLD（国民民主連盟）のネピドー事務所を軍が搜索する映像を独自に入手し、また軟禁状態のNLDの議員の電話インタビューを実施したとのことだった。NHKで働いているビルマ語放送の関係者は、この問題についてさまざまな考えがあるだろうと思う。公平・公正な報道をすることに何か課題等はあるか。

(NHK側) NHKでは常に公平・公正な報道を心がけて取材に当たっている。日本に在留するミャンマー人の方へインタビューすることも含め、さまざまな取材をしているが、この事態をどのように見るべきか、日本の役割は何か専門家とともに考える番組も制作するなど、さらに視聴者の理解を深められるように努力していきたいと思っている。

<新型コロナウイルス関連 在留外国人向け情報発信強化について>

- 以前から在留外国人に向けた情報発信を強化することの重要性について意見を述べていたが、非常に早く、かつ幅広く対応しており評価したい。

<「GLOBAL AGENDA」 Biden's America: What Next for the World?>

(1月30日(土) 10:10 ほか)

「DEEPER LOOK from New York」

Capri Cafaro: How Can Biden Administration Achieve Its Agenda?

(2月2日(火) 13:30 ほか) について>

- どちらの番組もタイムリーな内容だ。「GLOBAL AGENDA」は、アメリカ人パネリストも含めて、ゆっくりしたスピードで英語が話されていた。演出として、わかりやすくする意図があってゆっくり話すよう頼んだのか、あるいは人選に留意したのか関心を持った。「DEEPER LOOK from New York」は、英語を母国語とする出演者たちがネイティブのスピードで話していた。

「GLOBAL AGENDA」には、保守系のシンクタンクとして知られる、ハドソン研究所のウォルター・ラッセル・ミード特別研究員が出演しており、政治的なバランスも考えてアメリカ側のスピーカーを選んだ印象だ。多岐にわたる議論ができており、見応えがあった。スタジオでは、司会者の目線と同じ高さにパネリスト4人がリモート出演しているディスプレイの画面が並び、安定感や安心感がある演出だった。パネリストどうしが掛け合いを行っている部分も、昨年5月の「GLOBAL AGENDA」より臨場感が増してよかった。

- 2つの番組は、対照的で、どちらにも好印象を持った。

「GLOBAL AGENDA」はわかりやすく幅広いテーマで、全体状況を理解するのに役立つ内容だった。ただし、広く知られている内容が多く、専門的にもう少し深く語ってほしかった。

北朝鮮、アジア地域の防衛問題、中国や台湾との関係など、アジアに関する話題が多かったことはよかった。日本がアジアの中で果たす役割が、より大きくなることを予感させる流れで、興味深く見た。

「DEEPER LOOK from New York」は、司会のデル・イラニさんのコーディネート力が高く、出演者との掛け合いがもう少し多ければ、さらにおもしろい番組になったろうと感じた。出演者の、アメリカン大学公共政策学のカプリ・カファーロ特任教授は、オハイオ州議会上院議員として実務を経験したこともあり、バイデン大統領の施策やその背景の解説が、知らないことも多く大変興味深かった。

- 両番組とも大事な課題を取り上げ、特にアジア、日本にとってアメリカ新政権が持つ意味を整理するうえで大変有益だった。

「GLOBAL AGENDA」の論点の掘り下げの度合いにはテーマによって濃淡があ

ったと感じた。バイデン政権の外交政策については、台湾問題をめぐる慶應義塾大学の添谷芳秀名誉教授とミード特別研究員の議論が大変興味深く、日本あるいは日米関係においてどういう課題があるか、大変よく理解できた。

アメリカの国内問題については、逆に少々もの足りなかった。コロナ対策は、ワクチン接種が鍵ということは周知の話で新しさがなく、世界にとっても影響の大きな問題であるアメリカ経済については、パネリストに専門家がおらず、バイデン政権の経済政策の検証がなかったのが残念だ。次回取り上げてほしい。

また、全体に、パネリストは新政権に理解があり、期待にあふれていたと感じたが、民主党左派からの立場で論じる人、あるいは国民の半分を占めると言われる共和党を支持する人をパネリストに加えることを検討したのかどうか聞きたい。

「DEEPER LOOK from New York」は、司会者の質問が、どれも的確で、知りたい点を網羅していた。カファーロ特任教授の応答も率直で歯切れがよく、テンポもよかったと思う。短い番組でもインパクトが大きく、内容的にもタイトルにふさわしい質を保っていた。バイデン政権について、期待は大きい現実には「目標達成には時間がかかる」と結んだのに対し、「GLOBAL AGENDA」では「心強い」と、期待を強調する結びをしていたのが対照的で、意味合いが異なる印象を受けた。

- 両番組ともに好感を持った。「GLOBAL AGENDA」は、タイムリーで関心の高い課題が広く取り上げられ、手堅くまとまっていた。パネリストの人選も、男女2人ずつで、アメリカからは、白人と黒人の方が1名ずつ出演しており、ジェンダーにも人種にも配慮されていると感じた。ただし、内容は、既に知っていることが多く、若干深みに欠けていた。もう少し共和党に近い専門家が入っていたほうが、議論が深まったのではないかと。また、今後社会の分断がどうなっていくのかについても、より深い議論があったらよかったと思う。

- 「GLOBAL AGENDA」は、1月20日にバイデン政権が誕生し、1月30日に放送というタイミングがよかった。司会者の質問はバランスが取れていて、全体的によく準備され、パネリストが男女2人ずつである点もジェンダーに関する配慮が見られてよかった。

日本・アジアとの関係を中心とする、外交について触れている点は、NHKらしいよいアプローチだったが、アメリカの国内問題に関しては、新型コロナウイルスの問題に終始して、市民の不安を煽るQアノンやその信奉者たちによる暴力的行為に対して言及がないなどの点で、広がりがなかったのは残念だった。この点は、「DEEPER LOOK from New York」でも言及がなかったが、この問題を放置したままだと、バイデン政権は間違いなくさまざまな抵抗にあうと思うので、パネリストたちがこの問題をどのように見ているのか、非常に興味があり、触れて欲しかった。

「DEEPER LOOK from New York」では、15分という短い時間の中で、幅広くカファーロ特任教授の意見が聞けた。米国が置かれた情勢を広く理解しようとする視聴者にとっては、わかりやすい構成になっていた。

- 両方の番組ともに、ジェンダーを含め、ダイバーシティをしっかりと考慮し、ふさわしい専門知識を備えた人選がされていた。今後もこのような努力続けてほしい。両

番組とも、司会者の質問のテンポがよく内容もわかりやすかったが、問題の確認にとどまっており、さまざまなメディアですでに報道されている内容だったと感じた。視聴者としては、少しもの足りない印象で、議論がさらに深みに達し、課題だけでなく提言や、その提言に付随する困難、政策の具体的なシナリオにも触れられれば、より満足できたと感じた。

- 「GLOBAL AGENDA」は多岐にわたり網羅する内容だが、聞いたことのある話が多く、集中力を保つのが難しい場面もあって、視聴後、メッセージとして強く残るものがなかった。「DEEPER LOOK from New York」は絞り込まれたトピックについて深く話されており、例えば閣僚として注目すべき人物については写真とスーパーで注意を引くなど、伝え方にも工夫があつてわかりやすかった。

日本人のパネリストについては、名前の表記がNHKの国際放送の新たな方針に従い、名字、名前の順だったが、視聴者には、どちらが名字かわかるのか、名字と名前の表記順が変わったことは、どの程度、視聴者に浸透しているのかと気になった。

- 両番組ともに、バイデン大統領を取り上げたのは時宜を得ていたが、「GLOBAL AGENDA」では、もう少し論点を絞って、4人の専門家の意見の違いを出したほうがよかったと感じた。海外では、異なる意見を交わし合うことから内容を深く理解する視聴者が多く、アジアでも中国、インド、韓国など、意見を交わし合う討論番組に慣れている国も多い。それらの国のメディアと競い合うという意味でも、論点の整理に加え、専門家どうしや、司会者が互いに相手の発言に対し議論することがあつてもいいのではないか。

なお、専門家の名前など、画面上のスーパーの文字フォントについて、もう少しインパクトのあるデザインにしたほうが視聴者の印象に残り、NHKの国際放送らしい、より質の高い番組になると感じた。また、日本人出演者の名字と名前について、NHKの表記順の変更が浸透していないと思う。日本人も海外の視聴者も混乱していて、どちらが名字で名前なのかがわからない。名字は全て大文字で表記するなどの工夫ができれば、視聴者にとってもわかりやすいと思う。

今後に向けては、米新政権が世界とどのように関係を回復していくのかが重要な課題であり、日本も、アメリカの同盟国として、世界のリーダーとして何をできるか、といったメッセージを伝える番組が求められる。例えば、日米以外の専門家の声も聞くなど、さらに広い視点で「GLOBAL AGENDA」シリーズを展開してはどうか。

- 「DEEPER LOOK from New York」は15分という短い時間で凝縮された内容で、集中力を保って見られたが、「GLOBAL AGENDA」は50分と、少し長かった。NHKの番組ではこの長さがよくあるが、最近はコンテンツに対するアテンションスパン（集中力持続時間）が年々短くなってきている。テレビの前で、50分間ずっと目を離さずにいることが時代に合っているのか疑問に思った。長くても集中できるドラマやドキュメンタリー番組もあるとは思いますが、特に討論番組では集中力を持続するのに50分は少し長いのではないか。動画共有サイトであれば、ユーザーが、視聴中断や再開ができることから、長いコンテンツもあるが、基本的には30分以上の

ものを作る際には工夫が必要だ。適正な長さについて考えてはどうか。

- 好感と期待感をもって見守られる時期のバイデン政権始動のタイミングで制作された番組として視聴した。具体的な議論にはまだ早く、新政権が具体的に政策を動かす前なので、期待感にとどまらざるをえなかったのではないかと感じた。

オバマ政権時代に、国連WFP事務局長に就任したアーサリン・カズン氏と、ミード特別研究員がパネリストに選ばれたのは、アメリカ社会の分断を浮き彫りにするねらいだろうと期待したが、実際には対立的な意見がほとんど出なかったことに若干失望した。

また、日本から、アメリカ政治についての専門家が参加していたが、アメリカのパネリストと意見や論調の重なりがあり、あまり存在感が感じられなかった。外交政策の専門家である日本人パネリストについては、説得力もありよかったが、アジア政策全般について、専門外のカズン氏の意見を聞くのはやや無理があると感じた。

国内の課題を取り上げた「DEEPER LOOK from New York」も、数多く存在するはずの対立軸への切り込みに期待したが、カファーロ特任教授の楽観的な見解が雰囲気を作っていた。現実には非常に厳しい問題に直面しているので、カファーロ特任教授と議論できるような人物がいれば、もう少し討論的かつ鋭角的なものになったのではないかと。

- (NHK側) 「GLOBAL AGENDA」では、アメリカ人のパネリスト2人が、新政権の未来について楽観的な展望だった。分断するアメリカ、トランプ前大統領時代の政策の負の影響について、議論が深まることを期待したが、「今までより良くなっていくだろう」という前向きな気持ちが先に出てしまい議論が深まらない印象を与えてしまったかもしれない。

NHKワールド JAPANを視聴する習慣があり、日本やアジアに関心を持っている視聴者、特に日本から発信する情報に興味を持っている層を意識して討論をコーディネートした。日本から発信する意味を持たせるため、この討論にアメリカのアジア政策、日本との同盟、中国、北朝鮮、インド、アジア太平洋地域に対するアメリカの戦略について聞くことを心がけた。結果、1つのテーマを深めることは難しかったが、幅広い議論ができたと考えている。

パネリストの選択について、ミード特別研究員に出演を依頼したのは、異なる視点からの意見を期待したためだ。男女の割合については、バランスをとることも意識して選んだ。

- (NHK側) 「DEEPER LOOK from New York」の出演者については、司会者の意見や人脈も参考に、さまざまな立場の人に出演していただき番組を制作している。今回は、民主党の州議会上院議員経験があり、かつ米国内の保守系メディアにもよく出演しているカファーロ特任教授に、バランスを取りつつも民主党の当事者的な立場から意見を語ってもらえるのではないかと期待した。Qアノンのような現象については、まだ取り上げていないが、バイデン政権誕生とともに、アメリカの分断や共和党が今後どうなる

のかについても、しっかりと捉えていきたいと考えている。

(NHK側) 国際放送番組でも、アテンションスパンは意識している。新番組の多くは15分サイズにしているが、そういうアテンションスパンやネット視聴も意識してのことだ。一方で、土日には「NHKスペシャル」や今回の「GLOBAL AGENDA」のような50分番組も編成している。スマートフォンなどを利用する視聴時代には、視聴者の集中力をどう持続させていくのかという工夫も必要だと考え、研究しているところだ。

日本人の氏名の表記については、NHKワールド JAPANのホームページに、姓と名の表記順を変えたと記載しているが、出演者など本人が希望すれば、名前を先にする従来の形での表記もしている。個々の意向も踏まえて実施しているので、混乱するという意見についても承知しているが、時間をかけて周知を進めていくことが必要だと考えている。

2021年1月 国際放送番組審議会

2021年1月のNHK国際放送番組審議会（第676回）は19日（火）NHK放送センター（ウェブ会議）で11人の委員が出席して開かれた。

会議では、まずNHKの動きについて、続いて国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。ひき続き、「Home Sweet Tokyo Season4」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	河合祥一郎	(東京大学大学院総合文化研究科 教授)
副委員長	河野 雅治	(日本国政府代表・中東和平担当特使)
委員	岡田 亜弥	(名古屋大学大学院国際開発研究科 教授)
委員	鎌田由美子	(株 ONE・GLOCAL 代表取締役、クリエイティブ・ディレクター)
委員	阪田 恭代	(神田外語大学外国語学部 教授)
委員	佐藤可土和	(クリエイティブディレクター、株サムライ 代表取締役)
委員	佐藤たまき	(古生物学者、東京学芸大学教育学部 准教授)
委員	田中浩一郎	(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授 (一財)日本エネルギー経済研究所 参与)
委員	中曾 宏	(株大和総研 理事長)
委員	平子 裕志	(全日本空輸(株) 代表取締役社長)
委員	村上由美子	(経済協力開発機構 (OECD) 東京センター 所長)

(主な発言)

<最近のNHKの動きについて>

- 来年度からの経営計画の説明を聞いて、海外向け発信も強化していくと理解したが、NHKワールド JAPANの役割は国内外でさらに大きくなるのではないかと。国内でも国際放送への理解を促進するため、番組情報誌上での広報を試みるなど、さまざまな施策を検討してほしい。
- 「新しいNHKらしさの追求」という部分で、NHKならではのコンテンツに集中するという説明があるが、その具体的なイメージを議論しているのであれば知りたい。

(NHK側) NHKならではのコンテンツとは、NHKの強みである海外のネットワーク、全国53の放送局の地域ネットワークを生かした、国民の多様な価値観に応えるコンテンツで、多様性を持った番組の展開をすべきだと、考えている。

- 国の内外を問わずNHKの役割は非常に大きいものであると思う。NHKワールド JAPANのコンテンツに触れることをきっかけにして、日本人も、外の世界をどんどん見ていくことができるとうい。

<最近の国際放送の動きについて>

- いつも多様な番組を放送していて感心している。ABU（アジア太平洋放送連合）に対しても、マルチなプラットフォームによる配信を進めるグローバル・メディアとして、より積極的、戦略的に、関与してほしい。
また、持続可能な開発目標、SDGsをテーマとした企画に積極的に取り組み、特にその中でアメリカを取り上げるのは非常に大事だ。さまざまな社会の課題が取り上げられることが多いアメリカだが、SDGsに関わる革新性にも国際放送を通して注目すべきだと思う。
多言語放送のコンテンツとして、拉致問題も取り上げるべきだと思うが、海外向けに放送する場合、理解を促進するために、国際社会における取り組み、例えば国連の人権委員会での動きなども併せて伝えることが重要だ。
- 拉致問題を扱うコンテンツについては、視聴者に広く関心を持ってもらえるよう、被害者のご両親の心情を紹介するなど、心に訴える内容にすることがより効果的ではないか。

(NHK側) ABUについては、NHKの副会長がABUの副会長に就任したところで、引き続き積極的に対応していきたいと思う。

SDGsについても、今後、まず環境問題について、アメリカPBSのローカル局などとの連携で、番組を制作、放送する計画だ。持続可能な開発について考える番組を通して、日米の公共放送局が連携する機会を増やしていきたいと思っている。拉致問題については、これまで同様、十分に伝えていきたい。国連の人権委員会に関する指摘についても引き続き留意していく。

- 報告では触れていなかったが、今後の番組を通して、アメリカ大統領選挙後の課題や、特に社会の分断について、着目していくべきだ。

(NHK側) 社会の分断はアメリカに限らず、世界の各地で起きている問題なので、問題意識をしっかりとって、今後の番組やいろいろなコンテンツの展開に生かしていきたい。

- SDGsに関する番組が充実してきているのは大変好ましいと考えている。17のゴールは多様な分野を網羅しているので、今後、関連の番組が充実することを期待している。

日米間で環境問題の番組での連携が進んでいるという話があったが、現在、世界共

通の課題である新型コロナウイルスに関して、ABUにおいて、番組制作の連携や取り組みはないのか。

また、東日本大震災から10年で国内放送ではいろいろな番組を制作しているようだが、国際放送としても震災から10年後の現状や課題について番組で取り上げると、世界にとって、災害の問題を考える上で大きなヒントになるのではないか。

(NHK側) ABUに関しては、2019年11月に開催された東京総会でNHKが提案した「Asia-Pacific View」、素材・番組交換のためのプラットフォームが、2020年4月にスタートした。「NHKスペシャル」の英語化や、国際放送独自の番組を全編、あるいは部分的に提供している。引き続きコンテンツ提供を強化していきたい。

東日本大震災に関しては、国際放送独自でも特集番組を制作し、放送やビデオオンデマンド(VOD)に加え、一部をアメリカの公共放送PBSのプラットフォームであるAPT(American Public Television)への特別配信を実施するなど、3月初旬から世界の視聴者、特にアメリカの視聴者にも見ていただけるよう進めている。

<「Home Sweet Tokyo Season4」

#1 Here Comes the Typhoon!(12月5日(土) 8:10 ほか)

#2 Ramen Rhapsody(12月6日(日) 8:10 ほか)

#3 Time to say Yabai!(12月12日(土) 8:10 ほか)

#4 Facing Your Demons!(12月13日(日) 8:10 ほか) について>

- 効果的に日本の文化と外国人との暮らしや交流を伝える質の高い番組だ。タイトルは、自然な英語で伝わりやすく、Season4で新たに加わったキャスト、上白石萌音さんが演じる節子は番組をより魅力的にしている。ホームコメディータッチでエンターテインメント性が高く、かつ教育的でもあり、伝え方もとてもよかった。

イギリス人男性の主人公ブライアンが日本文化や習慣と出会い、最初は適応しづらかったが、次第に理解を深めていく物語となっており、外国人の目線に立ったよい手法だ。また、外国人を日本社会の一員として捉え、社会や家族にとけ込んでいく過程を効果的に伝えていた。

海外の上映会で人気のコンテンツということだが、どのような機会と場所で上映されているのか教えてほしい。

また、次はぜひ女性の外国人のキャストも増やし、外国人女性の悩みも取り上げてほしい。

- コミカルタッチで、同時に日本の文化、生活、風習、伝統、格言に関する情報も網羅されているところがよい。

主人公を演じるイギリス出身のBJフォックスさんが脚本も書いているため内容が伝わりやすく、本人も演技しやすいのではないかと思った。

上白石さんの英語能力に非常に驚かされ、キャストとして最適だと感じた。国際放送に登場する機会が増えたら、番組の幅、視聴頻度も上がるのではないかと。

- 情報が凝縮され、NHKらしいとても良い番組で、日本への親しみもわく。楽しく見られて、英語の勉強にもなる。今後もさらに改良させて続けてはどうか。次のシーズンでは新しい形でのストーリーが作られていくと思うが、シチュエーションコメディとして長く続けられる番組だと思う。

主人公のブライアンほか、娘のアリス、親戚の娘の節子など、自然な演技で、好感を持てた。義理の父の恒夫はやや誇張気味のキャラクターだとも感じたが、皆一様に、出演者が優れていた。

第4話の節分を扱った“Facing Your Demons!”と、第1話の“Here Comes the Typhoon!”が特によかった。第2話の“Ramen Rhapsody”と第3話の“Time to say Yabai!”は、日本の異質性が強く出て、外国人には受け入れられにくい面もあるのではないかと、思った。

- かねてから非常に良質なドラマシリーズだと感じていたが、今回、あらためてSeason4を見て、主人公のブライアンを演じるBJフォックスさんが、脚本も書いていることに気付いた。フォックスさんの、外国人として日本社会を見ている目が、効果的にこの番組構成に反映されていると思った。ユーモアを交えて異文化理解を促すところが良く、外国人の多くが日本の生活の中で感じるであろう内容が、うまく表現されていた。節分や桃太郎など、季節のイベントや童話など、日本ならではの文化、慣習や日常生活をコメディとしておもしろく、温かく伝えることに成功していた。

- 和気あいあいと温かいホームコメディになっているが、どのくらい人を笑わせるか、というコメディの本質という観点からだと、高い評価をするのは難しい。

また、日本の文化や歴史を紹介する教育的な観点からは、ターゲットが若い人や子どもなら、十分な説明だったが、日本の歴史や文化に関する教養を得たいというビジネスマンやある程度の教育レベルの人向けだとすると、もの足りないのではないかと。

- 各エピソードとも、起承転結がうまく構成され、わかりやすく楽しく見られた。16分半という長さもちょうどよい。

第1話では、家族で遊ぶ遊びとして、けん玉やかるたが紹介されていた。かるたは英語の物あてゲーム、「I SPY」との類似性もあり、また、KとCの区別がない日本語の特性をゲームを通じて伝えているところがおもしろい。

第3話では伝えようとするポイントが絞りにくかったが、第4話では、日本の節分という文化を紹介しながら、恐れなくて人生を進みなさい、という主人公から娘たちへのメッセージが伝えられ、シリーズ全体の最終話としてよい締めだった。

- この番組の視聴者は、日本文化をもう少し身近に感じたいという人たちではないかと思う。内容・構成はとてもいいが、言葉などの選び方は、視聴者に正しい情報になるものを選ぶべきだと思う。たとえば、第3話のタイトルにもなっている「ヤバイ！」の使われ方は、日本でもあまり一般的ではないのではないかと。

登場人物のキャラクターが魅力的なことに加え、例えば就活のスーツがお葬式の服装に見える、また独特のラーメンの食べ方への感想など、外国人が日本の特徴の中におもしろいところを発見することが興味深い。外国の人たちは地方まで足を延ばすことは少ないので、地方の豊かさを番組で伝えることもとてもよいと思った。

これだけ人気がある番組で、日本の文化をうまく伝えているので、強化してさらにおもしろい番組ができるのではないかと。第2話で、居酒屋の前で議論をしているシーンがあったが、居酒屋も日本ならではの楽しい文化なので、取り上げたらおもしろいのではないかと。

- 思わずクスッと笑ってしまうような、ユーモアに富んだホームコメディだった。いろいろなものが凝縮された16分半のドラマに仕上がっていた。

「三つ子の魂百まで」という言葉などは、はたして外国人に理解されるのかと視聴しながら疑問にも思ったが、このような言い伝えがあるのだということを海外に伝えるのもおもしろい。

上白石さんが演ずるアメリカ留学から帰国した節子、20代のZ世代が出てくるところが、Season4の最大の特徴だ。同世代の共感を得るところが多かったのではないかと。SNSで海外の友だちとコミュニケーションを取っていたが、こういったところがいかにもこの世代の人たちらしいと思った。
- コメディとして誇張のある表現も入っていた。頑固なラーメン屋の店主はひとつの典型ではあるが、実際にラーメン屋であるような店主がいるのか、リアリティーを欠いているようにも思い、少し誇張が気になった。全体的にはとてもおもしろく視聴した。インターネットでも話題になっていたのがよかった。
- 設定に少々強引なところもあったが、短い時間で、特に日本の風習をあまり知らない外国の人が見るには、ちょうどいいと感じた。とても楽しく視聴した。レギュラー4人の出演者も、エピソードごとの登場人物もとても自然に演じていてよかった。

4つのエピソードのうち、第4話では、節子とアリスがそれぞれ問題を抱えているが、そのことと、節分や桃太郎がどう結びつくのか、少しわかりにくかった。また、ブライアンが2回も見知らぬ小学生に豆を投げつけられる場面があったが、それは本当に体験したことなのか。実際に子どもたちがそんなことをするのか気になった。
- 上白石さんの英語の発音のよさには大変驚き、演技もすばらしかったし、柄本明さんなどベテランの出演者にも恵まれていてよかった。

この番組では日本の文化の単純な紹介というより、文化の違いや日本文化の中で誤解されそうなところを、トラブルとして設定し、出演者が克服していくところがポイントだ。問題を克服する際にユーモアを導入していくところがうまかった。頑固おやじという日本独特の、ムツとしているようで、実は愛に溢れた人だということを表現するために、ラーメン店のシーンで、柄本さんが目力で表現するという手法は効果的だった。

非常に好感を持てる一方、コメディとしておもしろみがあるか、海外の視聴者の反応が非常に気になった。反応は良いということなので安心したが、やはり、コメデ

ィーとしてより充実させるためには、キャラクターが確立していたり、成長したり、トラブルを克服したりというドラマを明確にすることが必要だと思う。主人公のブライアンは今回、どちらかというといギリスの子ども番組向けの立ち位置で、論したり説明したりする立ち位置だった気がしたので、その辺りは今後、どのように発展するのか興味深い。また今後もし新たな女性を登場させることを考えた場合、ブライアンなど登場人物の位置づけをどうしていくかが非常に重要になると思う。

(NHK側) 日本の普通の生活の空気感を伝えるガイドになることを心がけた。実際に旅行をし、あるいは住んでみると、いわゆるお土産ではなくコンビニで売っている意外な商品が思い出に残ったり、ラーメンの作り方を見てその凝り方にびっくりしたりする、というような感覚をドラマを通して伝えたかった。日本ではすべてを説明するよりも、モノや態度で伝えるところがあり、それをうまく表現する手法として日本の伝統的なホームドラマがある。番組では外国人も一緒に住んでいる日本を舞台に、大きな出来事が起きるわけではないが、日常のささいな言い合いなどをうまく笑いに変えつつ、いまの時代に合うホームドラマにすることを目指した。

脚本も担当した主演のBJフォックスさんは、イギリスのスタンドアップコメディアンだが、ドラマに出演するのは初めてで、自然に演じられるよう、自身の体験を入れた脚本となっている。

Season4で変えたところは、コメディ性とともに、人情話のような空気感を伝えるトーンを大切に部分だ。

視聴ターゲットは30代～40代で、小さい子がいるブライアンぐらいの世代に届けることを意識した。日本文化の深い部分については、興味をもった視聴者が自身で調べていただくことを想定しているので、番組自体で、あまり詳しく説明しなかった。

新しい女性の登場人物や、今後の継続の仕方などについては、検討しているところだ。

(NHK側) 上映会について、世界各地の日本大使館が実施している上映会に参加する形で開催している。大使館にある上映施設は、50人から80人規模の小さなホールである場合が多い。シリーズのうち1話だけ上映し、そのほかはVODでの視聴を紹介するという場合もある。新型コロナウイルスが感染拡大する中、期間を区切り、大使館が自身のサイトで、オンライン上映会を実施するケースもある。NHKのウェブサイトでは世界中に向け、無料のVODを実施しているので、好きなときに番組を楽しんでもらうため、SNSなども通じて広報活動をしている。

(NHK側) SNSでは、放送の視聴や放送後のVODの視聴を促すため、紹介用の動画や画像の投稿など幅広く行っている。4話のうち、まずは第1話を見てもらい、第2話以降を見てもらえるよう促す投稿など、工夫しながら集中的に広報し、VODやSNSに対しても好評意見を多数得ている。

2020年12月 国際放送番組審議会

2020年12月のNHK国際放送番組審議会（第675回）は15日（火）NHK放送センター（ウェブ会議）で11人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。その後、「2021年度国際放送番組編集の基本計画（案）」の諮問にあたり、説明を行った。審議の結果、番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。ひき続き、「Barakan Discovers: The Tokyo of 2020」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	河合祥一郎	（東京大学大学院総合文化研究科 教授）
副委員長	河野 雅治	（日本国政府代表・中東和平担当特使）
委員	岡田 亜弥	（名古屋大学大学院国際開発研究科 教授）
委員	鎌田由美子	（株 ONE・GLOCAL 代表取締役、クリエイティブ・ディレクター）
委員	阪田 恭代	（神田外語大学外国語学部 教授）
委員	佐藤可士和	（クリエイティブディレクター、株サムライ 代表取締役）
委員	佐藤たまき	（古生物学者、東京学芸大学教育学部 准教授）
委員	田中浩一郎	（慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授 （一財）日本エネルギー経済研究所 参与）
委員	中曾 宏	（株大和総研 理事長）
委員	平子 裕志	（全日本空輸株 代表取締役社長）
委員	村上由美子	（経済協力開発機構（OECD）東京センター 所長）

（主な発言）

<最近の国際放送の動きについて>

（NHK側） 先月の「The Shape of Sound: A piano paints the seasons of Nara」で、委員より質問があった翻訳の件についてお答えする。「神」を“god”ではなく日本語のまま“kami”とし、一方で「宮司」は“chief priest”と英訳しているが、神については、キリスト教の“god”やギリシャ、ローマ神話の“gods”とは異なる存在である神道の神を表す方法として、一部の英米辞書にも既に項目化されている“kami”と表現した。一方、宮司は、日本語の意味を受けて“chief priest”と訳している。このように表すのがより一般的で意味が伝わる言葉としてふさわしいだろうと判断した。

< 「2021年度国際放送番組編集の基本計画（案）」について（諮問・答申） >

- 国際放送局長からの説明と、先月の審議会の意見交換も踏まえて、「2021年度国際放送番組編集の基本計画（案）」は、原案どおり可とする答申をしたいが、異議はないか。
- 異議なし。
- 原案を可とし、答申することにする。

(NHK側) 答申いただき、感謝申し上げます。番組審議会で答申を得たので、この後、この「基本計画案」を1月の経営委員会に提出する。経営委員会の議決が得られたら、来年度の具体的な番組編成を決定し、2月の番組審議会で「2021年度国際放送番組編成計画」として改めて説明する。

< 「Barakan Discovers: The Tokyo of 2020」

(11月22日(日) 8:10ほか) について>

- とても素晴らしい番組だ。ホストがピーター・バラカンさんで、取材相手の本音を英語で引き出した。新型コロナウイルス感染が拡大する今だからというだけでなく、引き出した一言一言から日本人として新たに気づかせてもらったことがある。
新型コロナウイルスが浮き彫りにした、価値観のずれ、人種の分断、経済やスピード、効率重視だったこれまでのあり方の課題が、日本在住の外国人の視点を通して、より鮮明に見えてきた。渋谷に昔からあるという喫茶店では、そこに流れる時間を感じたし、エチオピアの人たちのネットワークと洋裁の技術を教える日本人とのつながりの話もよかった。逆に、エチオピア人が経営しているレストランで癒やされるという日本人もいて、お互いにつながっていることを感じた。
最後に、障害を持つ人向けに観光情報サイトを運営するジョシュ・グリズデイルさんを登場させたことが一番よかったところだ。障害を持つジョシュさんの仕事や言葉から人々のつながりを感じ、心が温かくなり、彼の語る多様性に大きく納得した。
- 非常に感銘を受けた。時間がゆっくり流れるようなペースで見ることができた。東京の、ふだんはせわしない場所も、人が少なく、ゆっくりと物事が流れ、バラカンさんの語り口もふだん以上にゆっくりしていた。とても癒やされる番組だった。
新型コロナウイルスの感染拡大によって生まれた“新たな東京”が鮮明に見えた。東京で暮らす外国人が日本社会との接点を大切に維持している様子など、街の多様化の特徴がよく出ている。一方で、見えなくなっているのが日本人どうしの関係で、かつてに比べてぎすぎすしてきているのではないかと思いつく材料になった。
- 外国人居住者が多い大久保から始まり、渋谷、葛飾、最後に浅草という流れ、そしてインタビューの選び方も、制作者の伝えたいことがよく分かる構成だった。大久保

は外国人にもよく知られた街で、新型コロナウイルス感染拡大の中で、その街に住む人の生活実態を紹介する最初のシーンとして、そこに暮らす日本人と外国人のインタビューを取り上げたのは、インパクトがあったのではないかと。

クリエイターのマテウシュ・ウルバノヴィッチさんが、新旧の店舗が混在する渋谷の街を描く際に、名曲喫茶の店主から、新型コロナウイルス感染拡大の中でも常連客が通い続けてくれていることを聞いて、街自体を家庭の延長線としてデザインするという考えを作品に生かしたところが興味深かった。

人と人との結び付きが強い下町である葛飾では、外国人もまた強い絆を持って暮らしていて、エチオピア人の家族やコミュニティーで行われている共助が、生き延びる力になっているという紹介がよかった。

また、東京が障害者にとってアクセスしやすい街になることが多様性のある社会にとって重要なポイントで絆が大切だと最後は締めくくっていた。東京在住のさまざまな外国人の視点により、東京の実態や課題がわかる番組で、日本人としていろいろと考えさせられるすばらしい番組だったと思う。

- 49分という限られた時間の中で多様な外国人に焦点を当て、それぞれのエピソードを通じて今日の新型コロナウイルス感染拡大の中で、東京の持つさまざまな側面を描き出したという意味で、ホストのバラカンさんの手腕は優れていた。

ただ、以前放送された「Barakan Discovers TOHOKU: The Lost and the Living」に比べると、感動は少なかった。多くのことを盛り込もうとして、メッセージが散逸した印象を受けた。例えば、個々の違いを受け入れて認め合う姿勢が進まないという問題や葛飾の難民申請を十年以上も続けているが認められないエチオピア人の話など、それぞれが1つの番組になるくらいの重みがある。難民申請を続けているエチオピア人のレストラン経営者の、エチオピアのコミュニティーを作りたいのではなく、葛飾コミュニティーを作りたいのだという話は、重要なメッセージを持っていると思う。

また、番組を通じて出てくる主要人物が全員男性で、多様性を語りながら女性が出てこないことに違和感を持った。外国人の方々が日本人との相互理解という点で苦労している面もあり、ぜひ日本人にも見てもらいたいと思った。

- 東京のさまざまな場所を紹介しながらヒューマンストーリーにつなげていく手法や東京のありのままの姿を人々の日常生活という視点から紹介したのはよかった。東京在住の外国人は、今どうしているのかという情報が提供できたこともよかったが、女性が出た方がバランスがよかった。

国内の外国人、また日本人視聴者にもぜひ番組を紹介してほしい。国内放送の番組を英語化して、NHKワールド JAPANで放送することがあるが、NHKワールド JAPANで制作した番組をぜひ国内でも放送してほしいという思いが強くなる番組だった。この番組が国内で放送されるのか、可能性はあるのか聞きたい。

- 全体的にはとてもよくできた番組で楽しめたが、日本は制度的に、外国人が永住することが極めて難しい国だという現実がある。エチオピア人で難民の申請をした人が、十年以上も認められるのを待ち続けているという話を取り上げていたが、世界でも日

本は最も認定数が少ない国のひとつで、ほぼ難民として受け入れることがない国だ。そういうことも、事実として番組の中で入れるべきではなかったか。ジョシュさんが、障害を持ちながらも観光で来日した際、よくしてもらったことがきっかけで日本に移住した、という話があったが、そういう日本人の優しさ、受け入れる力をメッセージとして打ち出せたことはよいが、番組として、しっかりと厳しい事実を伝えることも考えるべきではないか。

- すばらしい番組だった。ポーランド人クリエイターのマテウシュさんは、新海誠監督の映画で背景を描いているが、新海誠監督の風景描写は世界的にも非常に評価されている。そこに外国人の目から見た日本が入っていたのは、非常におもしろいと思った。

マテウシュさんは別のウェブサイトで、東京を美しいと思うかと言えばそうではないが、やはり各風景で美しさを出そうとはしているという趣旨のコメントをしていた。外国人の目から見た東京が非常にうまく表現できていたのが、特におもしろいと思った。映像もきれいで、音楽もとてもよかった。

- 日本で暮らす外国人の大多数を占める韓国、中国、台湾出身の方ではなく、ポーランド、エチオピア、カナダから来た住民で、比較するとなじみが深い国々の方を選んでいることが、多様性が進んできたことを実感させるファクターとなっていた。

番組全体の構成として三者三様の姿を描いていて、個々のエピソードとしてはとても楽しめて、いろいろなことを考えさせられたが、番組全体のメッセージをつかみ取りにくいという気がした。メッセージは、番組の最後に、バラカンさんが語った“sense of belonging”だと思う。エチオピアのコミュニティのエピソードでは、このメッセージを感じたが、ほかの2つのエピソードにおいてはあまり感じなかった。

今、新型コロナウイルスの感染がまた拡大している状況で、インタビューや撮影にとっても苦労されたと思うが、マウスシールドやマスクを着ける基準があるのなら聞きたい。1対1で話し合うシーンがかなりあったが、マウスシールドやマスクを着けずに普通に話しているように見えるシーンが複数回見られた。例えば距離を取っているとか、見えないけれど間に仕切りがある、時間の制限があるなど、気をつけていることがあれば教えてほしい。

- 東京は、ほかの世界の大都市と比較して、新型コロナウイルスの感染者数、死者数が相対的に小さく、安全で清潔な街という評価を一般的にされていると思う。加えて、今回、静かになった東京の街から聞こえてきた、多様化が進む住人たちの声に耳を傾けると、新型コロナウイルス感染拡大後の東京は、誰もが溶け込める街という新たなイメージが加わり、自分たちも気づいていなかった魅力を持つことになるのかもしれない。そういう気づきを与えてくれる番組だった。

キーワードは“sense of belonging”、つまりつながっていることを共有できる街としての特性だが、もし東京にこの特性があれば、世界で新型コロナウイルスが、人々や社会を分断する方向に作用した中であって、非常に貴重な特性になると思った。東京のこれまであまり認識されなかった魅力を、収束後の社会で、再び外国の方や企業を日本に誘致するために生かしていくという観点を、この番組で積極的にアピールを

してほしいと思った。

一方で、在宅勤務、ソーシャルディスタンスングの中で、日本人社会の間に広がっていると言われている孤立感、そこに多少ギャップをおぼえながらこの番組を見終えた。

- 東京という非常に無機質な巨大都市を、「2020年」というテーマでどう表現するか難しかったと思う。しかし、いろいろな要素の対比を表現することで、49分間をうまくまとめていた。非常に冷たく、非人間的な都市の側面に対して、人間味のある、温かい社会という面もあるという、冷たさと温かさの対比。渋谷を中心に再開発が進む大都市東京に対して、長い間変わらない伝統ある東京ということ。新型コロナウイルス感染拡大という新しい日常の中でも、下町の変わらぬ人情など、いろいろな形で対比をすることによってメガシティ東京を表現したことが、このチャレンジに対する答えなのだろうと感じた。

東京のこのようないろいろな側面、断面は、ニューヨークやパリでもあるのだろうし、そういう意味では、多文化共生的な東京の街を取り上げることで、ニューヨークやパリでも同じような経験をしているのではないかと視聴者に振り返ってもらうメッセージも含まれていると感じた。助け合わなければ生きていけないという現実にはネガティブだが、大都市では、だれでも溶け込むことが可能だという側面はポジティブな“sense of belonging”につながる。

難民申請が受け入れられない日本という社会の中で、エチオピアの人からは非常に強いメッセージを受け取ったが、そういう東京独特のポイントも出ていた。

マテウシュさんが、街というものは自分の生活の、家の一部なのだと言っていたが、多文化共生の街、東京ならではのコメントで非常におもしろい。全体として飽きさせることなくとてもよくできた番組という印象だ。

- 大変すばらしい番組で、特に企画がよいと思った。東京は現在、どうなっているのかだけでなく、どうあるべきなのかということもテーマになっていると感じた。今をそのまま見るのではなく、芸術的な視点から東京を描いていくという、マテウシュさんのようなクリエイターの登場によって、映像的な説得力が加わっている。

おそらくバラカンさんが出してきた答えなのだろうと思うが、番組の落としどころが、“sense of belonging”ということばで果たして本当によかったのかと感じている。

マウスシールドやマスクに関しては、見ている限り、きちんとしていたと思う。葛飾のエチオピア人の話で、娘さんのことを取り上げていた点は、女性に出演してもらおうという意味でもよかった。家族が、葛飾の中できちんと自分たちの生活空間を持っているというのはすばらしいことだ。

- (NHK側) 女性の出演者について、この番組に限らず、なるべく男女のバランスが偏らないように心がけており、今回も取材の段階でさまざまな候補者を検討したが、検討した結果、3名とも男性となった。今後は指摘を踏まえて、掘り下げ方や切り口を考えていくことで、ジェンダーについてだけではなく、さまざまなダイバーシティについて考えていきたいと思っている。

国内で放送されるかどうかに関しては、日本語版を放送することを検討している。

難民認定率が現状としては非常に低く、苦勞されている方がいるということは取材チームとしても意識していた。もう少し詳しい情報を入れることを検討してもよかったかもしれない。客観的な情報を入れることで、より心に残る番組にすることができたかもしれないので、今後もバランスを考えていきたい。

感染症対策に関しては、NHK全体で、取材においては対策を徹底している。今回の番組でも、企画段階から対策を検討し、ロケでは複数人の場合はマスクやマウスシールドを着ける、対談形式の場合は、互いに手を伸ばしても届かない距離を必ずとる、室内では1時間に一度は、5～10分を目安に換気するといったことを、徹底した。

(NHK側) “sense of belonging” というテーマは番組を作っていく中でバラカンさんと相談しながら、これがキーワードなのだろうと、いろいろ議論しながら進めてきた。最終的には、控えめに使うことにしたが、そのため、“sense of belonging” の受け取り方がさまざまだったのかとも思う。

2020年11月 国際放送番組審議会

2020年11月のNHK国際放送番組審議会（第674回）は17日（火）NHK放送センター（ウェブ会議）で9人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。その後、「2021年度国際放送番組編集の基本計画（案）」について説明があり、意見交換を行った。引き続き、「The Signs」「The Shape of Sound: A piano paints the seasons of Nara」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	河合祥一郎	（東京大学大学院総合文化研究科 教授）
副委員長	河野 雅治	（日本国政府代表・中東和平担当特使）
委員	岡田 亜弥	（名古屋大学大学院国際開発研究科 教授）
委員	鎌田由美子	（株）ONE・GLOCAL 代表取締役、クリエイティブ・ディレクター）
委員	阪田 恭代	（神田外語大学外国語学部 教授）
委員	佐藤たまき	（古生物学者、東京学芸大学教育学部 准教授）
委員	田中浩一郎	（慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授 （一財）日本エネルギー経済研究所 参与）
委員	平子 裕志	（全日本空輸（株） 代表取締役社長）
委員	村上由美子	（経済協力開発機構（OECD）東京センター 所長）

（主な発言）

<最近の国際放送の動きについて>

- 最近の国際放送について説明を受けたが、NHKでは番組に多様性をもたらすために、マネジメント層に、クォータ制を含め、ジェンダーのバランスを取る施策は何か考えているか。国際放送局では女性の方が多く働いている職場だと聞いているが、番組の責任者の方々は男性が多い印象だ。政府も民間企業も、責任ある立場の男女比率に関して、数値目標も含め、さまざまな対策を進めているが、NHKの取り組みについて聞きたい。

（NHK側） 現在、クォータ制は実施していないが、国際放送局について言えば、職員のはほぼ半数、幹部も半数は女性である。番組に多様性をもたらすために、プロデューサーのジェンダーバランスも意識している。

（NHK側） 女性活躍の推進のため、指導的地位に女性が占める割合を30%にするという社会的目標があると認識している。NHKでも、将来的に目指すべき

ものではあるが、まだ達成はしていない。国際放送局について言えば、女性の割合は高い。

(NHK側) 2016年に定められた行動計画では、協会全体で2020年の女性管理職の割合を10%以上とする目標を掲げたが、これはすでに達成済みである。さらに割合を増やすべく取り組みを進めている。女性職員が管理職を目指して経験を重ねられるような育成施策を進めていくことが重要だと考えており、次期経営計画の中でも、新たな目標や施策を考えていくことになる。

<「2021年度国際放送番組編集の基本計画(案)について>

○ 基本方針はよく理解できた。移動の制限がある今、在外邦人や外国人が日本に帰国、または訪問する方法、在日外国人が帰国する手段に関わる情報は、痛切に必要とされている。情報は錯そうしており、国ごとに対応も異なる。ラジオ、テレビ、インターネットなどのツールを効果的に使い、アップデートされた情報が届くよう、番組を編成してほしい。

(NHK側) 多言語で情報を発信し、番組サイトで、必要な情報を紹介するなど、できるだけきめ細かい発信をしていきたい。

○ この基本計画には英訳はあるのか。また、英訳を公開しているのか。「ウィズコロナ」という表現があったが、和製英語で海外には通用しないので、英訳の際には考慮してほしい。

(NHK側) 英訳するかどうかは今後検討する。英訳では適切な言葉を使っていく。

○ ネット時代に合わせた攻めの戦略で方向性はとてもよい。NHKワールド JAPANがさまざまに活動やサービスを拡げていることがわかったが、国内でそのことを認知されるよう広報施策を進めるべきではないか。また、これまでは日本が好きな層や、インバウンドの観光客向けに日本文化を紹介するニーズが意識されていたと思うが、新型コロナウイルスの感染拡大をきっかけに、信頼できる正確な情報へのニーズが高まってきていると考える。欧米発の情報に加え、アジアからも、信頼される情報を発信することが必要だ。文化のみならず政治、経済、社会に関わる情報も発信してほしい。世界中で信頼できる情報へのニーズが高まる今は攻め時で、戦略的に発信ネットワークを構築してほしい。すでにアメリカやアジアへの施策が進んでいると理解したが、アフリカ、ヨーロッパ、中東、南米などの地域向けにも取り組みを進めて欲しい。

○ 新型コロナウイルスの感染拡大に関しては、外国人コミュニティにおけるクラスター感染も心配だ。防災の分野で、大学と留学生向けのイベントを共催するなど取り組みを重ねた経験を生かし、新型コロナウイルスについて情報格差が生まれないように、国内の外国人コミュニティに迅速に情報を届けるという視点も入れるとよいのでは

ないか。また世界各国でのロックダウンに伴い、教育機関が閉鎖される状況が再び起こるのではないかと懸念している。このような状況下でのオンライン教育コンテンツとして、教育機関においてNHKの優れたドキュメンタリー番組などを利用してもらうようなアプローチ方法を考えるとよいのではないか。さらに、メディアの中立性、公平性が世界的に一層問われる中で、NHKの国際放送への信頼感や期待感が増している。計画の中で重視するポイントとして中立性・公平性を強調するとよいのではないか。

- 新型コロナウイルスの感染拡大による環境の変化を踏まえた方針で非常によいと思う。ただし昨年と比較すると、災害時の報道、防災・減災の情報提供への言及が減っている。災害のリスクがなくなったわけではなく、在留外国人に情報を公平に行き渡らせる必要があり、この部分については継続して、明確に方針の中に入れたほうがいいのではないか。ラジオに加え、インターネットにおける多言語化の方向性も打ち出していきたい。
- 中立性・公平性に加えて重要なのが、スピード感を持って正確な情報を提供することだ。国際放送として期待に応えるため、ファクトチェックなどの対策をどのように行うのか説明を加えてはどうか。

(NHK側) 可能な限り指摘を踏まえ、反映させたい。防災・減災については、来年度、番組を新設する予定でもあり、テーマとして継続して取り組んでいるため、それを意識した表記にしたい。

今、インターネットでは、テキスト情報は17言語に加えて、トルコ語のニュースサービスをネットで提供しており、合わせて18言語で提供している。テレビ国際放送においては、英語の放送をAIで翻訳し、字幕を付与するサービスを6言語7種類で実施しており、今後言語を増やすなど、サービスを強化していきたい。また、国内放送とも連携して、在留外国人に対する安全情報を多言語で提供することを十分に意識していきたい。

< 「The Signs」

Avatars (9月19日(土) 12:40 ほか)

Healthcare and Industry Unite (10月17日(土) 12:40 ほか) について>

- 「Avatars」では、現実の世界と仮想空間の区別が付きにくくなってきたことを実感し、恐ろしさを感じた。進行役のCGキャラクターであるDuendeには顔がなく、感情のこもらない話し方で、動作からも若干気味悪さを感じた。一方、「Healthcare and Industry Unite」では、技術の進歩にポジティブな印象を持つことができ、進行役のDuendeをより違和感なく見られた。
- 新型コロナウイルス収束後の新しい生活について日本発の革新的な動きを発信する「The Signs」には意義を感じる。文化に加え、社会技術情報でも日本の魅力を発信

し、デジタル世代の観点を伝えることはよい試みだ。進行役のDuendeには少し違和感があった。より番組と融合するような改善を期待したい。

- 取材した事例を重ねることで、これらの動きからあなたはどうか考えるのか、と問いかけられたように感じ、まさに“Signs=兆し”というテーマにふさわしい構成だと感じた。

「Healthcare and Industry Unite」については、開発の工夫が必ずしも日本国内で思うように生かされていない例もあり残念に思ったが、異業種のイノベーションが、今後日本にとってさらなる力になっていくだろうと感じられるいい番組だった。

- VR（バーチャル・リアリティ）が社会経済生活に応用されているのが、興味深い番組だった。特に「Avatars」では、VRが、デパートや学会などの場で応用され、新たなチャンスを生み出していることが紹介されており興味深かった。一方で、現実の社会をアバターが侵食していく世界とは、少々不気味だと思った。

「Healthcare and Industry Unite」では、VRがECMOの医療者向けの教育に使われ、PCR機器、医療用スーツといった分野でもさまざまな技術開発に貢献していることを伝えており、海外の視聴者に関心を持ってもらえるのではないかと感じた。ただし進行役のキャラクターには違和感を覚え、必要なか疑問に感じた。

- テーマそのものは重要だが、VRの利用や技術を、日本らしさ、新しさとして海外に発信する意味はどこにあるか、疑問に思った。海外のメディアでも数多く取り上げられており、それほど新しい情報ではないのではないかと感じた。

- 「Healthcare and Industry Unite」では、医療に関係のない企業が、新型コロナウイルスに対する取り組みを始めたのが新しい兆しといえると理解したので、そうした日本企業を世界に紹介できたのはよかったのではないかと感じた。両番組ともVRを使う場面が出てくるが、一般の視聴者が実際にVRを体験できる機会についての紹介が加われば、より興味が広がるのではないかと感じた。

- DuendeというCGキャラクターは妖精のような形をしており、番組の意図とどう関わるのか、非常に強い違和感を覚えた。加えて、番組の内容は、日本のデジタル後進国ぶりや、新型コロナウイルスの感染拡大への対応の甘さ、遅れがむしろ目立つことになると感じた。という危惧をもった。

- 新型コロナウイルスの感染拡大への取り組みの場合、日本からの発信に先端性や独自性を求めるというより、グローバルな思考で日本での事象や対応を発信すればよいのではないかと感じた。この番組は15分とコンパクトだが、深く考えさせられる番組で、インパクトがある。「Avatars」では、現実社会からバーチャルな世界へ向かっていくのか、と思いきや、実はアバターをツールとしてバーチャルな世界を現実社会に引き寄せようという試みだと気づく。対面がなくなってしまうリモートでのコミュニケーションに進んだ後、さらにアバターを登場させることで、逆に対面により近いコミュニケーションが取り戻せるということなのかもしれない。このことをどうとらえるべきなのか、

元のリアルな世界がバーチャルの世界でも究極の目的なのでは、などと思考が深まる。

「Healthcare and Industry Unite」では、優れた技術開発を実現しても、フランス等で先に使用され、PCR検査の数を増やしたい日本では利用されていないという現実を知った。一方で、開発して実用化するには相当な資金が必要でそこまでできるのか、しかしできなければ取り残されていくのでは、という複雑な現実にも思い至る。

15分の短い番組だが、さまざまなことを考えさせられる、よい番組だ。

- 番組では、そこにいない人でもアバターがその人として認知されるというところがポジティブに捉えられていたが、CGキャラクターのDuendeはそうした思考をなぞる役割にはなっておらず、むしろ逆向きのメッセージを発しているうまく機能していなかったように感じた。顔を作った方が親近感が生まれるのではないか。

(NHK側) この番組は始まったばかりで頂いた意見をしっかり生かしていきたい。

見た後に何か残るものがあった、考えさせられる番組だったという意見はありがたく、今後も思考を深められる番組作りを目指したい。番組としては、技術的な面と、社会的な面の双方から日本の現状を発信できるよう、テーマを選んでいる。「Avatars」に代表される、デジタル世界の日本における新しい現実を描く場合と、「Healthcare and Industry Unite」のように、実社会の現場取材して新しい動きを見ていく、2つのアプローチを続けていくことになると思う。日本の状況が、場合によって不十分なところがあれば、そこは正確に描いて、見る方に考えていただきたいというコンセプトで制作した。題材の新しさだけでなく、新たな試みが進むことによってコミュニケーションの問題を乗り越える可能性や、既存の医療の現場に異なる分野の新しい技術者たちが参加することで新型コロナウイルスの感染拡大を乗り切る力を与える可能性がある、など新しいポジティブな兆しを感じていただけたらと考えた。

DuendeというCGの司会者については、新しい兆しのコンセプトをデジタル司会者で体現できないかと試行したものだ。緑のイメージや、サステナブルな社会をつくっていくことを表現したいと思っているが、まだそこに至り切れていない。反省を込めて、さらに開発を進めたい。

< 「The Shape of Sound: A piano paints the seasons of Nara」

(10月3日(土) 10:10 ほか) について>

- とてもいい番組だ。番組の元となった映像詩シリーズ「やまとの季節 七十二候」もすばらしく、今回の番組の背景もよくわかった。日本のことを知ってもらえて、映像や音楽により言葉のいらぬ魅力が世界中に伝わる、公共放送であるNHKが取り組む価値のある番組だと思った。
- ピアニストの川上ミネさんが、自然の中でその力を感じ自然の中の神の存在に圧倒

されながら音楽を作っていくプロセスが、今だからこそわれわれの心に響くのだろうと思う。クラシック音楽のルールを超えて、自然と一つになって音楽で表現することに人々が心動かされ、世界中で視聴されたのだと思う。ドキュメンタリーとして優れた番組だ。川上さんの強さや生き方も音楽に表れており、コンサートホールに行かなくても、こうした音楽を通して人の気持ちに触れる体験をできることが今大切だと気づかされる。

- 映像と音楽、ともに引き込まれる内容で、ウェブサイトでも「やまとの季節 七十二候」を見た。同じ出演者である映像作家の保山耕一さんが番組中盤に来るまでほとんど登場せず、川上さんとのバランスが気になった。

春日大社にまつられている神を“god”とは表現せずに“kami”とし、宮司は“chief priest”と英語化していることの考え方についても知りたい。

- 日本特有の力強さを感じることができる番組だ。日本では古くから、自然の中で生かされているという認識がある。そうした自然との共存の考え方がうまく番組の中で伝えられている。特に今、新型コロナウイルスの感染が拡大している中、自然と人間の関わりに世界的な関心が高まっているので、タイムリーな番組だと思う。

また、最近、“well-being”、つまり「肉体的、精神的、社会的に幸福な状態」とはどういう状態なのか、についてよく議論がされるようになってきているが、川上さんが経験から、それを具体的に示されたことが意味あるものだと感じた。

今回は女性のピアニストが主人公だったが、他の番組でも、主人公のジェンダーについて、バランスに配慮されるとよいと思った。アンコンシャス・バイアス（無意識の偏見）を軽減するアクションの一つとして、メディアがバランスに配慮することは重要ではないか。

- 映像が美しく、ピアノの調べと映像が見事にマッチして、風景を感じて音楽を紡いでいくというドキュメントを見られる、よい番組だった。非常に癒される、心が洗われる思いだった。川上さんが、作曲は、手描きでスケッチした風景を、音に翻訳していく作業であると表現していたのが印象的だった。彼女自身の生き方、作曲における葛藤にも触れられていて、バランスも非常によかった。ただ、保山さんが制作している部分と番組との関係が少しわかりにくかった。

- 映像と音楽の美しさを十分に堪能できた。またこの番組では、川上さんの人生も重要な役割を果たす。ピアノから離れた時期もあり、紆余曲折の末、作曲という創作活動にも乗り出す、その心の軌跡も魅力的なストーリーになっていると思うが、人生の転換点について、深く語られず、説明が足りないと思ったところもあった。そのためか、最終的にたどり着いた春日大社への奉納演奏へのこだわりの動機がわかりづらかった。また、最後に語られる川上さん自身の発言は、強い意志のもと人生を選び取ってきた彼女の言葉としては、ややネガティブに聞こえた。これまでの人生はマイナスだった、やっと0点に届いた、といった趣旨の言葉の奥にどんな気持ちがあったのか、視聴者にどのように理解されたかと疑問をもった。

○ 質の高いドキュメンタリーを体験できてよかった。ただ、感動的なストーリーではあるが、主人公が奈良なのか川上さんなのか、どちらも中途半端になってしまった気もする。タイトルももっとはっきりと、例えば「祈りの歌」、「Songs of Prayer from Nara」など、春日大社での演奏をクライマックスとして描くドキュメンタリーらしいタイトルにしたほうがよかったのではないかな。

○ 映像には季節感があり、ピアノ演奏に日本らしさを感じ、すばらしい番組だった。最後の、これまでずっとマイナスだったがようやく0点になった、という趣旨のコメントは、芸術家らしいコメントだとポジティブに捉えた。番組タイトルは奈良が主人公、という印象を与えるが、実際はこの川上さんが主人公だと感じたので、内容に合っていないのではないかな。

○ 川上さんの持っている哲学性、芸術性が非常にすばらしく、「自然の中に既に音楽があつて、音楽家はそれをただ移し替えているだけ」という言葉には、ミケランジェロが彫刻に関して語った言葉を思い出し、本物の芸術家だと思った。

川上さんの魅力を、45分の中で余すところなく表現した、非常によい構成だったのではないかな。映像作家の保山さんの立ち位置がどういうものであったのかは、少し気になった。

(NHK側) 映像作家・保山さんとのバランスについては迷ったところだ。他のNHKワールド JAPANの番組で、保山さんだけを追ったドキュメンタリーを1年ほど前に放送したことがあるが、よい反響を得て勇気づけられた。そこで地域放送局からの発信を続けたいと、川上さんとの企画をスタートしたが、今回は、川上さんの魅力を出したいと思い、この構成になった。

「神」の翻訳については、専門チームが翻訳をしているので、確認をして、次回の審議会で回答する。

(NHK側) 地域の特別番組として制作したものが海外の視聴者に発信されたことは、奈良放送局にとっても貴重な経験となった。説明しきれていないのではないかと心配な部分もあったが、メッセージを汲み取ってもらえてよかった。

2020年10月 国際放送番組審議会

2020年10月のNHK国際放送番組審議会（第673回）は20日（火）NHK放送センター（ウェブ会議）で10人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、「Searching for the Standing Boy of Nagasaki」「Houses for Peace:Exploring the Legacy of Floyd Schmoie」について説明があり、意見交換を行った。

最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	河合祥一郎	(東京大学大学院総合文化研究科 教授)
副委員長	河野 雅治	(日本国政府代表・中東和平担当特使)
委員	岡田 亜弥	(名古屋大学大学院国際開発研究科 教授)
委員	鎌田由美子	(株 ONE・GLOCAL 代表取締役、クリエイティブ・ディレクター)
委員	阪田 恭代	(神田外語大学外国語学部 教授)
委員	佐藤可土和	(クリエイティブディレクター、株サムライ 代表取締役)
委員	佐藤たまき	(古生物学者、東京学芸大学教育学部 准教授)
委員	田中浩一郎	(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授 (一財)日本エネルギー経済研究所 参与)
委員	平子 裕志	(全日本空輸(株) 代表取締役社長)
委員	村上由美子	(経済協力開発機構 (OECD) 東京センター 所長)

(主な発言)

<最近の国際放送の動きについて>

- 日本在住のインド人が帰国するために、インド政府が手配するチャーター便についての情報を、国際放送のヒンディー語ラジオニュースで放送したと報告があったが、このような情報は公共性が高いと思うので、ほかの言語の放送でも実施していくべきではないか。

(NHK側) 今後、別の国でチャーター便を出すなどの帰国支援の措置が行われる際には、ほかの言語での放送も検討したい。

<「Searching for the Standing Boy of Nagasaki」

(8月30日(日) 8:10 ほか) について>

- ベトナム戦争時、ナパーム弾の投下により焼け出された少女の写真を調査し、その少

女が特定されたことが印象深く記憶に残っている。この番組では少年を特定するところまで至らなかったのは少し残念だったが、戦争や核兵器の痛ましさを伝え、白黒写真をカラー化して分析を進めるなど、取材力に裏打ちされた、丁寧に作られた番組だと思う。被爆してから1か月ほどで、長崎では青空教室が開かれたという紹介もあり、復興の力強さに驚いた。日本社会が学校教育を重要視してきたという点がここにも見て取れると思う。

- 非常に優れた番組で心を打たれた。1枚の写真を、幅広い取材と技術で深く分析し、番組を制作したことを評価したい。ほとんどの家族を失った子どもの話には心が動かされ、私たちが記憶すべき話だと思った。

海外向けに制作するときには、日本を原爆の被害者として提示するとともに、なぜそのようなことに至ったのか、過去と向き合う考察があった方が、バランスよくメッセージが伝わると思った。

- 瞬間を記録するというのがメディアの役割だが、この番組では瞬間を写した写真だけではなく、写真をきっかけに自己の体験を話してくれた人たちの証言までを含めて記録した点が重要だ。生き残った子どもたちの中に、多くの自殺した人たちがいたということが、兄弟の言葉を通して伝えられたことに胸が詰まった。新しい切り口の番組だと感じた。

国内で放送された日本語版から編集によりカットされた地形などの情報については、残す方法もあったのではないかと。

8月に編成した10本の「戦争と平和」関連番組のうち過半数が原爆を題材にしたものだったが、何か意図があるのか。

- 大変感銘を受けた。長崎放送局が主導して調査を進め、さらには地域の被爆後の状況をひもといたという意味で、貴重な番組だ。番組の中で少年が特定されるのではという期待感を持って見ていたが、結局特定までは至らなかった。当時10歳ぐらいに見られる少年が、存命だとしても85歳くらいだ。被爆者の高齢化が進んでおり、話を聞き試みは今後ますます重要だと改めて感じた。このような試みはぜひ今後も続けてもらいたい。

ジョー・オダネル氏が同時期に撮影した他の子どもたちのその後についても興味を持った。

- 視聴者の興味を引くタイトルと導入だ。原爆の被害を体験した人たちの証言、エピソードを組み合わせ、戦争のむごさ、孤児のその後の人生の悲惨さを、写真の少年の人生にも投影して語り、4人の証言者の話が生々しく、戦争の怖さがよく伝わった。また、科学的アプローチがNHKらしく、調査能力が遺憾なく発揮された番組だ。多様な視聴者を意識した手法が取られており、興味を引き付けつつメッセージを伝えることができたと思う。

オダネル氏が被爆地、特に孤児の写真撮影の中で戦争に対する気持ちが変わっていったところが大事で、晩年のインタビューで、原爆投下に対する気持ちを述べたシーンがこの番組の価値を高めたのではないかとと思う。世界の視聴者の評価と感想を聞

きたい。

- 日本人、アメリカ人問わず心打たれる内容だった。科学的分析も大変勉強になった。一つ気になったのは、アジアの視聴者の受け止めだ。この番組のほか、戦後75年の関連番組では被爆者に焦点をあてる番組が多かった。アジアの中で日本を加害者として見る視聴者がいるのか、一連の関連番組についてどのようなフィードバックが来ているのか気になった。もし来ているならば、今後の番組制作においても、それらを勘案した上で、構成を議論していくことが必要だと思う。
- 小さな子どもが経験した被爆や戦争の悲惨さに胸が詰まり、強く印象に残った。科学的検証については、結論を導くための情報の示し方に少し不安を覚えた。写真に基づいて、少年の症状について言及していたが、それは可能性の一つとしては提示するのはよいが、断定するためには複数の症状の検証が必要ではないか。

最終的に少年が誰か、期待したほどには明らかにならなかった印象だが、1枚の写真からデータを引き出すのは大変な作業で、限られた情報から迫ろうと試みたことはすばらしい。
- NHKならではの取材力に基づいた質の高い番組の例だと思う。謎解きのような構成には興味を引き立てられた。6月の審議会で取り上げた番組「Digital Detective」では、最新のデジタル技術を使って謎を解く内容だったので、そのような内容を期待したが、今回は違ったので少しがっかりした。だが、写真の真の意味は、詳細に見ることで戦争に対する様々な考えが沸き上がってくるということにあるのだろう。

この番組は戦争の悲惨さが底流のテーマだが、終戦後、生き残った人たち、特に孤児が生きて行くことがいかに大変だったのかがわかる。写真が訴えるメッセージに共鳴した証言者たち、孤児で今日まで生存されている方々が、改めて自分たちの境遇を言葉にしたことの意義が大きい。

オダネル氏も写真を撮ることにより、次第に原爆投下への考えを変えていく。アメリカは戦争をどう考えたのか、あるいはヒューマニティーとは何か、考えさせられる。
- 1枚の写真を題材にするというコンセプトが番組を際だって特別なものになっている。NHKの戦争関連番組を見ると、常に新たな学びがあるが、今回も証言者のリアルな言葉がインパクトを持って伝わってきた。戦争が終わってもなお命が失われていたということのリマインドしていくことは重要だ。

アメリカで上映会を実施した際、感動したというリアクションの報告があったが、ネガティブな意見は全くなかったのか。世界の見方がどうなのか気になった。
- この1枚の写真こそが戦争のつらさを象徴するシンボルであり、メタファーとして機能している。写真の背景の詳細や少年の身元を深掘りするベクトルと、視点を広げて、写真が語る当時の社会を見る、という二つの異なるベクトルがあり、演出的にまとめていくのが困難だったかもしれない。調査のプロセスを追うことで第一のベクトルへの期待が膨らむ。しかし、第二のベクトルがより重要なのだ、と納得させる演出が必要だったのではないか。

(NHK側) 8月の編成では、アメリカで配信している、公共放送サービスPBS関連の編成担当者からの評価、過去の放送や配信後に寄せられた評価等も勘案して番組を選んだ。被爆に関する番組への関心は高く、PBS関連の編成担当者との意見交換の中でもNHKの戦争関連番組は非常に質が高いと言われている。被爆関連以外にも、「NHKスペシャル 731部隊の真実」「NHKスペシャル 戦慄の記憶 インパール」などの番組を英語化して放送するなど、戦争に関する番組を多様に編成した。今回は、様々な番組の中から評価の高かったものを選んだ結果、原爆関連の番組が複数放送された、ということだ。また、戦争関連番組を国際発信する場合は、海外の視聴者も受容できるようにすることも重要で、制作の際にもアジアやアメリカからのフィードバックを考慮しながら進めている。

- 「Searching for the Standing Boy of Nagasaki」については、今後上映会の予定はあるか。「Houses for Peace」はアメリカ人であるシュモア氏の非常に勇気ある行為を取り上げた番組なので、アメリカ、特にシアトルの人たちは、親近感を持って見てくれると思うが、「Searching for the Standing Boy of Nagasaki」のほうはどうなのだろうか少し不安に感じた。

(NHK側) 「Searching for the Standing Boy of Nagasaki」は今年制作したばかりの番組なので、今後、上映会の希望があれば行っていきたい。実施については上映先の文化施設、大使館と十分協議をして、その国の方の受け止めにも配慮しながら、選んでいる。

(NHK側) 国際放送の場合、番組のテーマに関連した国ではどのように見られるかということも常に頭に置きながら制作する。大事な要素だと思うので、今後も国際放送局を中心に、海外からのフィードバックなどに配慮しながら番組制作に当たっていきたい。

(NHK側) この写真は番組のきっかけになった特別な写真で、長崎で取材を行う際、被爆者の皆さんはこの写真を見たときに涙し、「とても他人ごととは思えない、これは自分の姿である」と言う。ローマ法王が世界に紹介したということも取り上げたきっかけの一つだが、取材の成果も蓄積されてきたこともあり、番組化すべきだと考えた。日本国内でも、原爆への関心が低くなってきていると感じており、当時の状況や被爆者の置かれた状況を追体験することが重要だと考えている。視聴者に被害の状況を客観的に伝えるのみでなく、追体験して理解を深めてもらうことを目標にこの写真をテーマに番組を制作しようと考えた。謎解きの形をとりながらも、最終的に少年が特定できなかったが、75年後のリサーチの限界ということもある。平和を希求し、核の悲劇を繰り返さないというだけでなく、悲惨な体験を経てなお、生き抜いた方たちがいる、ということも伝えたかった。新型コロナウイルス感染拡大、という2020年の状況の中で、人生の教科書となるようなメッセージを届けることができたのではないだろうか。

< 「Houses for Peace: Exploring the Legacy of Floyd Schmoie」

(8月16日(日) 8:10 ほか、初回2018年8月11日(土) 10:10) について>

- 悲惨な戦争がテーマだが、人間が信頼に基づいて共に立ち上がる力を持っていることに、温かな気持ちになった。初めて知ったことも多く含まれており、FBIの資料を入手するなど、フロイド・シュモーさんの生き方をきちんと伝えきっていた。一緒に汗を流し行動を共にして、その国で暮らしていくシュモーさんの取り組みや生き方は、今の時代にも、貴重なヒントになる。

日本人の技術者のコメントに「一緒にやる」という言葉があったが、資金のみに偏らない日本の国際協力のあるべき姿について考えるとき、この言葉の重みは大きく、よいメッセージが世界に発信されたと思う。

- この番組を見て気持ちが明るくなり、穏やかな気持ちになった。ぜひ国内、海外に関わらず多様な人に見ていただきたい番組だ。

シュモーさんの活動に参加した方の説明で、黒人の女性がいつも同じ方で繰り返し紹介されていたのが気になった。人種の多様性を強調しながら特定の黒人女性を繰り返し登場させることで、逆効果になるのではないかと少し心配になった。

戦争で傷ついた人を支援する方法として、シュモーさんの取り組みを知ることは重要で、ぜひ行動力のある若い世代に届くようにしてほしい。

- この番組で、シュモーさんを知り、とても勉強になった。今、番組が制作された2年前には、それほど表面化していなかった人種の問題が大きく顕在化しており、日系アメリカ人への偏見や差別の問題に立ち向かったシュモーさんの活動を描くこの番組の重要性が増していると思う。特にアメリカは新型コロナウイルスの感染拡大により大変な状況にあり、黒人に対する偏見の問題に加え、アジア人に対する差別も深まっている。この番組のメッセージを、現代の社会問題の文脈で再度強調し、うまく番組の冒頭や最後にコメントを追加できれば、普遍的な人間性の尊さが届くのではないかと思った。

- 「Houses for Peace」というタイトルは非常によかった。活動が広島で始まり、長崎へ、さらに世界に展開したことから、「Houses for Peace」というタイトルを付けることによって、普遍的なメッセージとして海外に伝わる番組になった。また、原爆については広島のみならず長崎にもっと注目してもらうことも大事で、ぜひ長崎についてのメッセージも伝えてほしい。

この番組は、平和論につながるポジティブなメッセージをさまざまな角度から伝えている。シュモーさんはピースメーカーとして活動を推進したと思うが、ボランティアの西村宏子さんを通して、市民平和論の観点からも勇気を持たせる内容になっている。また、「誰もがきちんとした場所で暮らせる世界の実現」、国連で言う“Habitat for Humanity”に通じる内容で、人間の安全保障を確保する積極的平和論を考える番組としても非常によかった。韓国でシュモーさんにつながる方々にもぜひ見てほしい。

- 希望を与える番組だと思った。1948年にはさまざまな改革的な試みや支援が政府や、

海外の組織により進んだ時期だと思うが、母国のアメリカで募金を集め、日本に来て家を建てるといふ、シュモーさんのような個人の努力もあったと知ることができたのは、大変興味深かった。

その後、韓国でもエジプトでも、同じように平和の家を次々に作ったが、こうした活動は、今日の国際協力につながる人道支援の原点であり、何が国際協力へと突き動かすのかを改めて考えさせられた。

特に現在のアメリカでぜひ見てもらいたい番組だ。オンライン上映会やトークセッションでどのような議論が行われたかについても知りたい。

- ありきたりの原爆関連番組とは異なったアプローチで、原爆投下後の状況を伝えるのみならず、普遍的なメッセージを含み、よくできている。多様な人種による混成ボランティアチームを創り上げていたのは、当時としてはかなり先駆的で、アメリカ国内でもなかなか難しい時代、遠く離れた日本で実現していたのは画期的だ。また、今日の分断されたアメリカ国内の社会と対比させてみても非常に興味深い。

2年前の番組の再放送ということだが、今年度から、日本人のローマ字表記を姓一名の順に変更したと聞いているので、新しい基準に合わせて変更することができたらよかった。

- シュモーさんはかなりユニバーサルな視点の方だと感じた。世界全体、まさに地球社会に生きている人間の「人道」という大きなテーマを扱っている。

原爆の投下は戦争を早く終わらせるために必要だったというトルーマン大統領の説明は今もアメリカ人のおそらく7、8割の人の心の中にしっかりと根付いていると思う。原爆投下をどう捉えるかは、75年間尽きない議論だ。そうした議論とはパラレルなテーマとして、原爆を投下した後の対応について見ていくというのがこの番組のアプローチだと思う。

シュモーさんは「私は罪の意識で来ました」と話していた。現場での対応の中で人々がどう感じたのかを知ることによって原爆の問題を捉えることが重要ではないか、と感じた。

また、記録保存については、オダネル氏の写真も含めて、公文書館等でのアメリカの記録保存の能力の高さを学ぶべきだと思った。

- この2つの番組は、補い合うところが大きい。「Searching for the Standing Boy of Nagasaki」では、戦後、親戚にたらい回しにされ、ひどい目に合ってしまうというような、日本人同士の分断、偏見の存在が語られていたが、「Houses for Peace」は、ボランティアが国籍や人種を越えて集まり友情を育んでいる。また、シュモーさんが、なぜ活動を始めたのか、説明も丁寧にされていてよかった。

- シュモーさんについては知らなかったが、「家」にフォーカスしているところに、番組としてのインパクトがあった。この番組の中の、平和活動家の考え方が今の若い人にとっても響くのではないかと思う。若い人たちが考えていること、求めているものに近い。戦争を題材にしているが、戦争を超えたメッセージがあるところがこの番組のよいところだ。

- シュモーさんが発言している内容に、勇気と行動力のある人だと感嘆した。このような人の存在は、私たちの生き方に大きな影響を与えてくれる。アメリカで上映会を行ったのは非常にすばらしい企画だと思うし、日本国内でも上映会やトークセッションを企画し、特に学生には必ず見てもらえるようにするとよいと思う。シュモーさんには、当時の皇太子の家庭教師以外にもネットワークがあったのか。

(NHK側) 再放送するにあたって、現在の社会状況におけるメッセージ性はより高まっているとの指摘は、その通りと思われるが、再放送にあたっては、そのまま放送することとし、解説を入れることはしなかった。

名前の表記の順番についても、特に変更しなかったが、今年4月以降に制作された番組が、再放送でも多く編成されていけば、全体として統一性は出てくると思う。

(NHK側) 同一の黒人女性の写真を、複数回紹介した点について、遺族などを通じて当時の写真や資料自体を入手するのが困難な状況があり、提供いただいた写真を使った。実際にはさまざまな人種や国籍の方が参加し、延べ100人を超えた。

分断され不寛容な社会状況の中で、70年以上前のシュモーさんの活動から考えさせられることが大きいと、アメリカの方に言われた。制作から2年経っているにもかかわらず、意味を増しているという意見を聞いてうれしい。

ヴァイニング夫人のほかに人脈があったかということについて、GHQの占領下における日本では、さまざまな分野で人脈が生きており、復興の活動を支えていた。今後さらに取材を続けたいと思っている。

(NHK側) 上映会でのトークセッションでは共生というテーマがクローズアップされた。共生のために、個人として今何ができるのかということ、ハワイの戦艦ミズーリ記念館、広島平和記念資料館、そして全米日系人博物館の代表者たちが語り合った。

2020年9月 国際放送番組審議会

2020年9月のNHK国際放送番組審議会（第672回）は15日（火）NHK放送センター（ウェブ会議）で9人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず「2020年度後半期の国際放送番組の編成」について、および最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。ひき続き、「DEEPER LOOK from New York」、「NEWSLINE IN DEPTH」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	河合祥一郎	(東京大学大学院総合文化研究科 教授)
委員	岡田 亜弥	(名古屋大学大学院国際開発研究科 教授)
委員	鎌田由美子	(株 ONE・GLOCAL 代表取締役、クリエイティブ・ディレクター)
委員	阪田 恭代	(神田外語大学外国語学部 教授)
委員	佐藤たまき	(古生物学者、東京学芸大学教育学部 准教授)
委員	田中浩一郎	(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授 (一財)日本エネルギー経済研究所 参与)
委員	中曾 宏	(株大和総研 理事長)
委員	平子 裕志	(全日本空輸(株) 代表取締役社長)
委員	村上由美子	(経済協力開発機構 (OECD) 東京センター 所長)

(主な発言)

<「2020年度後半期の国際放送番組の編成」について、
および、最近の国際放送の動きについて>

- 「2020年度後半期の編成」について、アメリカの公共放送サービスとの連携を強めていくというメッセージを受け取ったが、他地域での連携について知りたい。また、最近の国際放送の動きについて、戦後75年に合わせオンライン上映会と対談会を企画し、「Houses for Peace」を上映したとのことだが、これは一般の視聴者も見られるのか。

(NHK側) アメリカではPBSなど、公共テレビサービスとの連携が先行していたが、今回新たに公共ラジオサービスであるNPR (National Public Radio) を通じて音声サービスの提供を開始した。また従来からアジアやアフリカなどの地域では、多言語放送を現地のラジオ局を通じて送信している。

オンライン上映会については、NHKワールド JAPANのウェブサイトで、「Houses for Peace」を上映会の前後にVODで公開し、また日

本語版をNHKオンデマンドで一定期間配信した。日本語版と英語版を視聴できる環境を作った上で、オンライン上映会を行った。

< 「DEEPER LOOK from New York」

Erica Groshen: What Does the Post-Pandemic Labor Market Look Like?

(8月4日 (火) 13:30 ほか)

Damon Hewitt: What Will it Take to Stop Racism and Police Brutality?

(8月18日 (火) 13:30 ほか) について>

○ 「DEEPER LOOK from New York」と「NEWSLINE IN DEPTH」のどちらも、ニューヨークに新しく作られたスタジオの活用を念頭に制作された番組だと理解した。どちらも、「変わりつつある社会」をテーマにうまく構成されていた。

ただ、「DEEPER LOOK from New York」は、キャスターとゲストをリモートでつなぐ形式で、対話が15分間続いており、非常事態下ではしかたないとはいえ、映像に変化が乏しかった。

○ 「DEEPER LOOK from New York」は、キャスターのデル・イラニさんの仕切り方がとても上手で、非常にすばらしい番組だ。15分という長さもちょうど良く、質問も的確で、ゲストが話しやすい進行だった。ゲストごとにテーマが一つに絞られていて、分かりやすく、キャスターによる前振りとまとめのコメントも、理解を深めるのに役立った。

コーネル大学労働経済学客員教授のエリカ・グロシェンさんの話は、日本ではなかなか聞けない話で興味深かった。また、人権問題を専門とする弁護士デーモン・ヒューイトさんは、ご自身も黒人で、これまで人種差別への認識が思うように変化してこなかった社会の実態を話していたのが印象深かった。リアルな映像が世界中の人々の心を動かし、抗議活動などの行動を起こす原動力になっており、映像の持つ力に改めて気付かされた。

○ キャスターの人选がよく、問題を効果的に掘り下げていた。グロシェン教授からは、労働市場の今後について話があり、状況が回復するのに8~10年かかるという考察が興味深かった。できれば、インタビューの合間に、統計資料が表示されれば視聴者にとってより分かりやすかった。

ヒューイト弁護士へのインタビューでは、ワシントンのデモの様子が映し出されるなど、映像が効果的に使われていた。

○ 「DEEPER LOOK from New York」は、世界の視聴者に問題を身近なものとして考えさせる材料となり、非常に良質な番組だ。キャスターによる質問、議論の展開もよく、重い課題でありながら、最後にいちろの望みを持てるまとめ方に好感を持った。

グロシェン教授が若者に、未来に希望を持ってほしい、コロナの時代にスキルを身

につけ、人生で大切なことを見つける時にしてほしいと話していたが、ぜひ日本の若者にも聞いてほしい内容だった。それを受けたキャスターが、コロナはよりよい未来を構築する機会になるかもしれないとまとめたことも、視聴者を元気づけたと思う。グロシェン教授には、なぜ経済が長期にわたって停滞しているのか、理由をもう少し聞いてもらえていればなおよかった。

ヒューイト弁護士へのインタビューの最後に、キング牧師の「一部の人への不正義がすべての人の正義に対する脅威である」との言葉が引用され、人種問題を自身の問題として受け止めさせるようなまとめだった。

- ニューヨーク発を生かした番組で、非常にスタイリッシュな番組だと思った。今後もグローバルな課題を取り上げてほしい。

キャスターにはインド出身の方を起用することで、国際的な視点からのコメントができていてよかった。番組の最後に希望が持てるようなコメントで締めていて、前向きな気持ちになれる。「ブラック・ライブズ・マター」運動について、今後の社会を変えていくための発展的な動きとして捉えていくべきだと日本のメディアとして発信できたのはよかった。

- 経済のニュースというと暗い話になりがちだが、グロシェン教授の話は、これから社会に出る若者に向けた温かい励ましや、新型コロナウイルスの影響で都市部でのビジネスがうまくいかなくなっても、住宅街などのエリアに新しいビジネスの拠点が移る可能性など、ポジティブな見方だと思った。

人種差別の問題について、暴動ばかりクローズアップされると、本質的な問題が見えにくくなってしまう。日本での運動の捉え方と海外の捉え方のギャップについても聞いてみたかった。

- テンポのよいインタビューで、15分間の充実感が素晴らしい。最後のキャスターのひと言も、非常に素晴らしいので、全世界の人に視聴してもらいたい良質な番組だ。

- ゲストが自宅で話をするという番組の雰囲気がよかった。新型コロナウイルス感染防止対策が必要な時だからこその演出で興味深く見た。

(NHK側) キャスターは、インドの出身で、オーストラリアやイギリスの公共放送でジャーナリストとして勤務の経験もある。世界各地を見てきた経歴とジャーナリストとしての実績が、他人にはない視点を提供してくれている。

「ブラック・ライブズ・マター」の回については、ゲストに黒人の人権弁護士を招き、論点を押さえてもらった上で、インド出身のジャーナリストであるキャスターにも当事者の立場から話を展開してもらうことで、一部で暴動に発展している事実を番組内で伝えながらも、BLMを差別という人権問題と闘う取組みとしてきちんと捉え、幅広い視点を提示したかった。

(NHK側) キャスターは、インド出身でオーストラリアやアメリカでも経験を積ま

れた方で、NHKワールド JAPANの価値に共感してくれる人だったことも起用した理由の一つだ。NHKワールド JAPANで番組を担当したいという強い希望を本人も持っており「DEEPER LOOK from New York」のチームに入ってもらった。

< 「NEWSLINE IN DEPTH」 FROM NEW YORK

- THE VACCINE RACE ほか (8月27日 (木) 9:15 ほか)
- MASK DEBATE ROILS US ほか (8月28日 (金) 9:15 ほか)

について>

- キャスターが座っているスタジオは非常にきれいだと思うが、正面から映した際、スタジオセットに斜めに線が入っており、納まりが悪く感じた。視覚的な問題だが、気になった。13分で話をよくまとめていたと思う。ニューヨークから発信して、アメリカ市民向けに伝えることにも力を置いている印象を受けた。
- テーマとやり方はとても見やすかったが、内容に関しては総花的で、すでに知られている内容が多かった。
- ライフスタイルは、どう変わっていくかという内容では、マスクの装着についての議論など、日本人にとっては新鮮な取り上げ方だった。ただ、ワクチンに関する話は少し情報が古いと思った。
ニューヨークには国際連合はじめ、主要な国際機関の本部が集まっており、SDGsの専門家が多い。「NEWSLINE IN DEPTH」、「DEEPER LOOK from New York」とともに、ぜひSDGsの各目標について掘り下げてほしい。
- テーマが総花的で、あまり深さを感じることができなかったが、ニュース番組として受け止めた。
- とても短い時間によくまとまっていると思ったが、少し掘り下げ方が浅かった。
- ニューヨークにできたスタジオからの新しい番組という意味においてはよくできていると感じ、また、東京と役割分担をすることで、働き方改革にもつながると思った。
リポーターの姓と名の記載順だが、27日放送では、姓が先で、28日放送では名が先になっており、表現の揺れが気になった。
- テーマによってはかなり旬を過ぎてしまったものもあったが、あまりアメリカのニュースに触れない人であれば、新しいと感じるかもしれない。英語のニュースに触れている人やアメリカ人から見ると、タイムリーとは言えない内容もあった。ターゲットにしている層について知りたい。

(NHK側) この番組は「NHK NEWSLINE」で一度放送したものを再編集したものもあり、内容として新しいものばかりではない。姓と名の順番については、今年4月からNHKでは基本的に姓と名の順に表記する方針としているが、本人の意思に沿った運用もしている。現在は、移行期でもあり、両方のケースが混在している場合もある。

番組のターゲット層については、国際放送のため、世界の視聴者がターゲットだが、特にアメリカの人たちにも届けたいと考えている。公共放送PBSは、比較的長いニュース企画も放送しているので、このようなことも参考に、アメリカの視聴者向けに、「NEWSLINE IN DEPTH」でも、新しい情報をより深めて届けたいと思っている。

(NHK側) 今回のように、過去に放送された内容であっても、スタジオのコメント等で工夫し、より最新のアプローチを加えて可能な限りタイムリーに演出する努力をしたい。

スタジオセットについての意見も今後に生かし、カメラの位置や照明の当て方など工夫を続け、最適な見せ方を探りたい。

(NHK側) ニューヨークスタジオは、いずれ生放送で毎晩稼働するのが最終的な目標だ。ニューヨークでは、まだ在宅で働いている人たちも多く、制約も多いが、できる限り前向きな試行を続けたい。今回は第一歩だが、アメリカ大統領選なども控えており、指摘をふまえて方法を模索し、ニューヨークから発信する基盤をさらに整えたい。

2020年7月 国際放送番組審議会

2020年7月のNHK国際放送番組審議会（第671回）は21日（火）NHK放送センター（ウェブ会議）で11人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、「NHK Documentary UNSOLVED CASES Oswald and JFK」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	河合祥一郎	(東京大学大学院総合文化研究科 教授)
副委員長	河野 雅治	(日本国政府代表・中東和平担当特使)
委員	岡田 亜弥	(名古屋大学大学院国際開発研究科 教授)
委員	鎌田由美子	(株ONE・GLOCAL 代表取締役、クリエイティブ・ディレクター)
委員	阪田 恭代	(神田外語大学外国語学部 教授)
委員	佐藤可土和	(クリエイティブディレクター、株サムライ 代表取締役)
委員	佐藤たまき	(古生物学者、東京学芸大学教育学部 准教授)
委員	田中浩一郎	(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授、 (一財)日本エネルギー経済研究所理事 兼 中東研究センター長)
委員	中曾 宏	(株大和総研 理事長)
委員	平子 裕志	(全日本空輸株 代表取締役社長)
委員	村上由美子	(経済協力開発機構 (OECD) 東京センター 所長)

(主な発言)

<最近の国際放送の動きについて>

○ 国内放送で7月8日（水）に放送した歴史秘話ヒストリア「ペスト 最悪のパンデミック」を見たが、医学者の北里柴三郎が取り上げられていた。ペストと新型コロナウイルスによるパンデミックについての類似性や、日本の医学者や科学者が伝染病との闘いにおいて、どのように世界に貢献してきたか紹介されており興味深い内容だった。国際放送でもぜひ放送してほしい。

また、国際放送全体の番組表について、例えば、NHKの番組情報誌「NHK ウィークリー ステラ」が発行されているが、国際放送については情報がないようだ。国際放送を広報する一環として情報誌などへの掲載があるといいと思う。

(NHK側) 国内放送番組は、必ずしもすべての番組が国際放送を前提としているわけではないが、頂いた意見を参考に、ふさわしい番組については、国際放送についても検討していきたい。

国際放送の番組表は、随時、ウェブサイトで公表しており、海外の放送事業者や配信事業者にも送っている。また、見どころを映像を含めて紹介した、英語版の番組ハイライトも送っている。「ステラ」については、国内放送の広報が目的で、国際放送に関する情報の掲載は、なかなか難しいと理解しているが、頂いた意見は今後の参考にしたい。

- 最近、「NHK WORLD-JAPAN」の表示や情報が、今まで以上に、国内放送番組でも目にとまる。「ステラ」にもぜひ掲載してほしいと思う。国内にも英語放送に触れたいと思っている潜在的な人はたくさんいるだろうし、学習効果もあるだろう。
- 新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、総合テレビやEテレでも再放送が増えていると感じる。国際放送の好評だった番組を国内で放送してもいいのではないかと思った。

(NHK側) 審議会でも意見を頂くことが多い特集番組などは、国際放送独自で放送した後、国内でも放送するケースがあるが、基本的にはBS1やBSプレミアム、Eテレでの放送が多く、総合テレビでの放送は比較的少ない。今回の新型コロナウイルス感染拡大下においては、国際と国内両方で放送された番組で評価の高いものは、再放送も何度か行い、戦後75年の今夏は、過去にアメリカで非常に高い評価を受けた番組の再放送を予定している。意見は大変ありがたく、今後も評価が高い国際放送の番組中心に国内での放送も進むよう検討していきたい。

< 「NHK Documentary UNSOLVED CASES Oswald and JFK」

Part 1 The Pawn (6月13日(土) 10:10ほか)

Part 2 The Chessmaster (6月20日(土) 10:10ほか) について>

- JFK (ケネディ元アメリカ大統領) 暗殺を調査している専門家の存在を新たに知り、事件についての知識がさらに深まって興味深く見た。ただ、なぜこの番組をこのタイミングで制作したのか、きっかけがわからなかったので経緯を聞きたい。
犯人とされるリー・ハーヴェイ・オズワルドの妻役の俳優の英語はロシア訛りがあり聞き取りにくく、内容を理解できない部分があったので、字幕が欲しかった。
- NHKスペシャル「未解決事件」は、新発見や新証言から未解決事件の謎の解決を目指すシリーズだと理解している。JFK暗殺は、アメリカでは映画やテレビ番組で取り上げられることが多いテーマで、かつ、CIAが関与していたという考えも広く知られていたと思う。大統領暗殺はアメリカ人にとって重いテーマでもあり、特にアメリカ人視聴者の反応がどうだったか知りたい。
冒頭のアナレーションについてだが、陰謀に関する決定的証拠が見つかったという印象を与える内容だった一方で、最終的には、事実は謎のままという結論だったため、

若干、誤解を与えるのではないか。また、再現ドラマと証言や調査に関するインタビューの関係性が少しわかりづらく、もう少しうまく連動していると、より説得力のある番組になったのではないか。しかし、構成がドラマ仕立てになっていたことで、この事件に詳しくない視聴者でも楽しめる番組だったと思う。

- 今なぜNHKがこの番組を制作したのかということに加えて、アメリカのメディアもこの番組の制作に関与したのかも知りたい。

オズワルドをはじめ、再現ドラマの俳優の演技がうまく、緊迫感を持って畳みかけるような展開と構成でドラマに引き込まれたが、ドキュメンタリーとドラマとの境界はどこにあるのかという疑問をもった。事実の描写に加え、ドラマでは演出も加えている印象だが、冒頭の番組タイトルバックに使用されている映像は「NHK Documentary」の字幕とマッチしないと感じた。

- ドラマ部分は大変よくできていた。元CIA職員を含む66人の証言を基にしていて説得力が、ドラマとしても、ドキュメンタリーとしても、引きつけられた。

これまでのさまざまな説も承知した上で、この番組を見て、オズワルド単独では実行できなかったのではないかと考える材料を得ることができた。狙撃の後、比較的早く捕まったこと、また、オズワルドのプロフィールが拡散するスピードが速かったことは、偶然だとは思えない。オズワルドの射撃能力が単独で成功するほど高くなかったかもしれないということ、また妻にJFKに対する憎しみを話したことはなかったことを考え合わせると、背後に誰かがいたのではないかという考えに落ち着いた。

CIAの関与についても、積み重ねた取材結果から、可能性があるとして自然に導かれた。ただし、どの程度確信をもって番組を制作したかや、疑問が残っているとすれば、そのことも具体的に説明するべきではないかとも思った。

また、オズワルドの狙撃のほかに、同時に別方向からも撃たれた可能性について説明があったが、もう少し科学的な説明を加えてほしかった。ウォーレン委員会（大統領特命調査委員会）の報告書とは異なるシナリオだっただけに、最新科学による具体的な分析を期待した。

もう一つの疑問は、CIA関与の組織的動機だ。CIA自身がはっきりと説明することはないと思われるので、番組でどこまで踏み込んで語るのか、制作の過程でどのように検討したか知りたい。

- 暗殺について、事実として当然知ってはいたが、この番組を見て、ああ、そういう面が強かったのかと思った。日本との関わりについても触れられていて日本人にとっても興味深い内容だった。

白昼、目撃者が多い暗殺であったにも関わらず、どうしてこんなに謎が多いのか。だからこそ今でも語られるのだと思うが、そこが少しでも明らかになったのかというと、見ている側からすると従来からの疑問は消えず、非常に重いテーマのドキュメンタリーを見たというのが正直な印象だ。

- NHKスペシャルの番組ウェブサイトに掲載されている「なぜいまJFKなのか？」という問いへの答えとして、「現代にも通じる様々なテーマが内包された、まだ終わっ

てない事件だから」という制作者のコメントを読んだ。また、「取材のきっかけは、トランプ大統領がケネディファイルを全公開するとしながら直前で撤回したこと」ともあり、きっかけは自然なものだと納得したが、タイミングとして、アメリカ大統領選が控えているこの時期に、NHKがJFK暗殺を扱った番組をアメリカでも放送して大丈夫なのか、政治的な意図を勘ぐられたりすることはないのかと、少し不安になった。

NHKスペシャル「未解決事件」は、これまで、日本の事件を扱ってきており、今回初めて国際的な事件であるJFK暗殺を取り上げ、国際放送で放送することには特別な意図があったのかどうか、また、アメリカの視聴者から反響があったのであれば知りたい。

- 今年はアメリカ大統領選挙の年であり、なぜ今のタイミングで放送したのかを知りたい。

また内容については、JFKの暗殺を巡る多角的な説についての説明が少し足りていなかったという気がする。初めて見た人にとっては、勉強になると同時に、説としては限られたもののみで構成され、偏った印象を与えてしまうのではないか。

番組が協力を求めた66人の専門家の分析をもっと詳細に検証して紹介したり、日本の番組なのだからJFK暗殺を研究している日本人の学者の意見も出したりする工夫があった方がよかった。

ドラマ部分はとてもよくできており、オズワルドの苦悩など、人間性がうまく描かれていた。日本人のミドリという女性が関わっていることは勉強になったが、当時の日米関係を研究している日本の学者を出したほうが、より理解が深まったのではないか。

- JFK暗殺を扱った国内外のドキュメンタリーに比べても、この番組は新しい事実、証言に裏付けられた迫力のある仕立てになっており、NHKの真骨頂だと思った。

JFK暗殺への道は日本が起源であったという非常に興味深い事実を知ることができ、CIAの内部でJFKへの反発が強まったという見方も、新しい驚きだった。

ドキュメンタリーとして証言の分析に加え、丹念な文書の読み込みをして、それを元にしたドラマを併用することでこの番組に迫真さが増している。ただ、どこまでが事実で、どこからが仮説なのか、判然としなくなるという問題があるように思った。

オズワルドやミドリ、ロシア人の妻マリーナのキャスティングもふさわしくしており、マリーナのロシア語訛りの証言は、あたかも記録フィルムを見ているかのような錯覚に陥った。

番組を見終わると、直ちにいろいろな疑問が湧いてきた。ケースオフィサーを操った上層部には、いったい誰がいたのか。CIAという組織はその後どのように変化を遂げたのか、あるいは同じような体質が残っているのかなど疑問が尽きなかった。そのため続編の制作を期待したい。

- 冒頭、日本が暗殺事件の起源であるということから、厚木コネクションという説が展開されていくのかと期待を持ったが、結局、そこから深まらなかった。そのため、なぜ日本のNHKがJFKの暗殺をめぐる陰謀、あるいは謎に関して番組を作るのか

がわかりにくかった。後半、66人の専門家をもっと前面に出したほうが番組としては落ち着きがよかったのではないか。

興味深かったのは、6月の審議会の視聴番組との共通点で、この番組も一種の調査報道であり、機密指定文書の解除が進めば、それ自体オープンソースに変わっていくので、情報公開を待ちながら分析が前に進んでいるということかと考えた。しかし、この段階でなぜNHKがこの番組を作る必要があったのかふに落ちない部分も残っている。

- ハリウwoodsの映画を見ているようで、エンターテインメント性もあり、楽しめた。番組を見るターゲットをどう考え、大統領選挙を控えたアメリカでどのように捉えられるか、政治的に使われる可能性に関して、どのように感じているのか、NHKの考えやこのような番組を作る意義について知りたい。
- ドラマ仕立てが非常によくできていた。特にロシア語訛りの英語を話すオズワルドの妻のキャスティングにリアリティーがあり、こうしたキャストを集め、ドラマ撮影をするのは費用も含め大変なものだっただろうと思う。

(NHK側) 国際放送で放送するきっかけについてだが、もともとNHKスペシャルと同時に、国際放送での展開も検討しており、総合テレビでは60分と54分だったものを国際放送では前・後編各50分に再編集して放送した。あくまで事実を積み上げて制作した番組であり、政治的意図は全くない。諸説あることについては、国内の放送ではNHKスペシャルの後に30分ほどのドキュメンタリーを放送していたが、国際放送では時間の関係上このドキュメンタリーは放送しなかった。

(NHK側) NHKスペシャル「未解決事件」は2011年からシリーズがはじまり今回が8作目だ。トランプ大統領がケネディファイルを全て公開すると宣言し、2017年12月に一部が公開された。そのタイミングでディレクターが新しいシリーズの制作を考え、2年近くかけて取材や制作し、番組として放送できたのが今だった。

また新たに元CIA職員の証言が得られたという理由もある。CIAは生涯守秘義務がある組織で、取材相手もすべてを語ることはできないだろうが、それでも新たな証言をしてくれたことが大きかった。

66人の専門家の紹介については、国際放送では、アメリカ国内などで既知の事実はなるべく割愛し、取材で得た新しい情報を中心に内容を構成した。

なぜNHKがやるのかという指摘については、日本のNHKだからこそ、取材を受けてもらえたという経緯もある。ケネディ元大統領のおいであるロバート・ケネディ・Jrは、アメリカ国内メディアの取材はほとんど受けない。他国のメディアだからこそ、アプローチできることもあるということに改めて感じた。

CIAの関与については、取材で得た証言等から確認が取れたもののみ

を紹介しているのので、番組の内容については確信を持っている。

C I A 関与の動機の部分については、まだ残された最大の謎だと思っている。時がたつにつれて新たな証言や資料が出てくるということは、これまでも経験があり、後にアップデートをすることは、非常に大事な作業だと思っている。

(NHK側) アメリカ国内の番組モニターからのレポートをいくつか紹介すると、「ドキュメンタリードラマが成功していて大変わかりやすかった。ただ、ドラマが少々やり過ぎで、これが真実なのかと思うところもあった」「事実に基づいてはいるが、殺人ミステリーを見ているようだった」「多くのアメリカ人はこの事件について教科書で習う、ほんのわずかな知識しか持っていないと思うが、学校では教わらなかった新しい歴史を知ることができた」「このチャンネルでこのテーマを取り上げたことにまず驚いた。なぜこのタイミングなのかわからなかったけれども、オズワルドと日本との関わりを知ってからは納得した」などがあつた。

(NHK側) ドキュメンタリーに再現ドラマのシーンを融合させることの意味についてだが、ファクトとフィクションを両輪として強く組み合わせることができると考えている。

その分、ファクトとフィクションの境がわかりにくくなる側面もあるという指摘を頂いた。今後、検討を進めて、視聴者に誤解を与えない効果的なファクト・アンド・フィクションの融合したコンテンツを作っていきたい。

2020年6月 国際放送番組審議会

2020年6月のNHK国際放送番組審議会（第670回）は16日（火）NHK放送センター（ウェブ会議）で11人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近のNHKの動きについて説明があり、「これでわかった！世界のいま」の内容について報告した。続いて、最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。ひき続き、「Digital Detectives」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	河合祥一郎	（東京大学大学院総合文化研究科 教授）
副委員長	河野 雅治	（日本国政府代表・中東和平担当特使）
委員	岡田 亜弥	（名古屋大学大学院国際開発研究科 教授）
委員	鎌田由美子	（株 ONE・GLOCAL 代表取締役、クリエイティブ・ディレクター）
委員	阪田 恭代	（神田外語大学外国語学部 教授）
委員	佐藤可土和	（クリエイティブディレクター、株サムライ 代表取締役）
委員	佐藤たまき	（古生物学者、東京学芸大学教育学部 准教授）
委員	田中浩一郎	（慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授、 （一財）日本エネルギー経済研究所理事 兼 中東研究センター長）
委員	中曾 宏	（株大和総研 理事長）
委員	平子 裕志	（全日本空輸株 代表取締役社長）
委員	村上由美子	（経済協力開発機構（OECD）東京センター 所長）

（主な発言）

<NHKおよび国際放送の最近の動きについて>

○ 「これでわかった！世界のいま」の番組SNSに掲載したCGアニメーションについて批判が寄せられたが、それに対して謝罪と対応策を発表したことについて説明があった。今回の事態が起こったのは、番組制作現場の品質を管理するレベルや意思決定のレベルに多様性がある人材が欠けていたからではないだろうか。外部の専門家の意見を聞くのは有益だと思うが、日本のメディアの中で社会的にとっても大きな影響力を持つNHKの番組制作の意思決定プロセスに、どこまで多様な視点を取り入れられる体制を作れるかが鍵だろう。

多様な視点とは、女性の視点や、あるいは日本人以外の多様な価値観を持つ人の視点かもしれない。そこに対応しないと、今後も同じようなことが起きる可能性がある。

NHKの番組制作の意思決定のプロセスに一步踏み込んだ対策を取らなければ、根本的な解決にはなかなかつながらないのではないかと懸念している。

(NHK側) 現場のチェック体制に甘さがあったと認識した。番組制作の意思決定の体制にもう少し多様性を持たせることは非常に重要なテーマになっている。ぜひ頂いた意見も参考にさせていただきたいと思う。

- NHKワールド JAPANでは、新型コロナウイルスをはじめ、政治などさまざまな問題について、情報発信していることがよくわかった。アメリカのみならず途上国で衛生状態が悪いところなど、多岐にわたって情報発信している努力には敬意を表したい。

また各所でNHKワールド JAPANの番組上映会を行なったとの報告があったが、具体的にどのような形で実施したのかを教えてください。

(NHK側) 番組上映会は通常、スクリーンがある部屋で大勢で見るものだが、今回は実施の形態を変えた。NHKワールド JAPANのウェブサイト内にあるオンデマンドのページから視聴してもらう形にした。参加者は1週間の間、24時間いつでも好きな時にそのリンクから番組を見てもらえるようにした。そして1週間後の週末に、オンライン上で制作者との対談や質疑応答をおこなった。

- 上映会をオンラインで開催することで、幅広い層に番組を見てもらえるようになったのか。

(NHK側) 離れた地域から参加する人が増えた。今後、新型コロナウイルスの影響が収まっても、この形式での上映会も継続したい。

< 「Digital Detectives」 (4月25日(土) 10:10 ほか) について >

- 非常に力作だと思う。ハードボイルドなタッチで、構成もよかった。近年の実例を取り上げて、非常に説得力のある番組になっていた。最近のハーバード大学の研究では、デジタルの衛星写真を見ると、中国の武漢で病院への往来が去年の夏頃から増えたのではないかということだった。公開されている情報をもとにした情報収集活動であるオープンソース・インテリジェンスには、利便性と怖さの二面性があることをよく捉えていた。

また、こうした活動がいわゆるフェイクニュースと闘う上での大きなヒントになるのではないかと期待できる。単に現在の状況だけでなく、これまでの活動ぶりも含めて深く説明し、わかりやすく番組を構成していた。非常にNHKらしい力作だと感じた。

- 複数の具体的なエピソードを紹介していた。インターネット上の公開情報を使って調査し、真相の解明に至るというストーリーそのものが、タイトルのおり探偵物語的な番組として非常に楽しめた。とても興味深くわかりやすい番組構成になっている

と思う。

ジャーナリズムは真実の解明と報道がその本質だとすると、まさしくこれはジャーナリズムの本質を問う題材だったのではないかと非常に好意的に見た。公開されたインターネット上の情報だけを使って、市民が自力で真実を追及することができるテクノロジーが存在することを知って非常に面白かった。

一方で、このようなデジタルテクノロジーについては、意図的にフェイク情報をでっち上げることも可能ではないかと思った。その場合、フェイク情報をどのように見分けるのかという懸念が出てくると思う。

今後はこういった公開されている情報の真がんを見抜く人材の育成、あるいは情報を公開する組織の倫理や道徳が問われる時代になってくるのではないか。

- 実例が非常に多くすばらしい番組だった。知らないことも多かった。ただ、現実世界では、非常に無力感を感じる場面も多いのではないかと思った。カメルーンのケースやイランのケースは、真実を暴かれた側が非を認めたが、大半のケース、特に全体主義的なリーダーがいる国では、非を認めないだろうし、認めないと結局それ以上追及することはできないだろう。

そういうときに、このデジタルテクノロジーを駆使する人たちはどうするのか。結局のところ別の国家等がこの技術を活用しなければ対抗できないのが現実の社会だと思う。そのような無力感を視聴者に感じさせることも、この番組のもう1つの重要な意義なのかと思った。

でっち上げやフェイクニュースもあるので、真がんを見抜く目が必要だと思う。非難された国も、同様にSNSを使ってさまざまなプロパガンダ、あるいはプロパガンダに見えないように世界に影響を及ぼそうとしている。そういうところにも注目すべきではないか。

NHKはこの変化をどう受け止めているのか。足で稼ぐジャーナリズムというものは変容しつつあり、こうした新しい情報収集の方法が出てきている。例えばインターネット上の情報をもとに調査報道をするイギリスの市民ジャーナリスト集団「ベリングキャット」とNHKが連携する時代がいずれやってくるのではないか。

- 非常にクオリティーの高い優れた番組だった。8つのエピソードが取り上げられていたが、丹念に、インタビュー、映像、そしてデータを組み合わせて、それぞれのストーリーに説得力を持たせて構成されていた。これだけ情報があふれている時代に、「真実」が誰によって、どのように作られているのか。そしてその「真実」をどう見極めるかが非常に難しい時代になったと、この番組を通じて改めて痛感させられた。

この8つのエピソードでは、「不都合な真実」をジャーナリストたちが暴いていく展開だった。しかし彼らはインターネット上の情報は正しいという前提で使用していたと思うが、それは本当に真実なのか、情報操作されているおそれはないのかとも感じた。「ベリングキャット」のメンバーが良心に基づいて「真実」を暴こうと動いているところを捉えていたが、一方で、こういう人たちのパソコンやウェブサイトなどがハッカーなどに乗っ取られるといった可能性はないのか。そういう意味で、インターネットから得られた情報を真実だとして安易に提供することは非常に難しいということ深く考えさせられた番組だった。

- すごい番組だと驚き、吸い込まれるように見た。インターネット上の地図情報やGPSによる位置データ、個人のSNSの情報、そして並外れたデジタルスキルを持つジャーナリストという3つの要素が重なることによって、以前は不可能だったことが可能になってくる。まさに今はこういう時代なのだと思う。

- こういう調査をする人がいることは、さまざまなメディアなどを通じて断片的に知っていたが、今回まとまった一つの番組として非常に見応えがあった。「Digital Detectives」に限らず、ジャーナリストは、情報を統制したい側にとってはとても目障りなので、どういう人がどういう技術を持っているかを特定できる状態になると、身の危険にさらされてしまうのではないかと少し心配した。

番組を制作する上でこういうジャーナリスト、もしくはジャーナリストに情報を提供する情報源となる人々を守るために工夫していることがあれば、教えていただきたい。

- 本当に見応えがあり、映画を見ているようで迫力がありおもしろかったが、よく取材を受けてくれたと思った。番組に出演することで顔などが公開されてしまい、本当に命の危険はないのかと思った。しかし、改めてこの番組を見ると、今の社会は、多くの情報がオープンになっており、誰もがチェックされているとも言え、こういう「ベリングキャット」のような人たちも、さまざまなメディアが取材することで、ある意味チェックされることになるのではないかと。ジャーナリズムがジャーナリズムをチェックすることがうまく作用すれば良いと思う。

今後、デジタルの世界は情報の入手方法が、さらに重要になっていくと思うので、NHKはこういう番組をぜひこれからもどんどん作ってもらいたい。

- とてもおもしろくよくできた番組だった。ただし大きな課題が1つ、この番組の中では、全く触れられていなかった。それはプライバシー侵害についての問題だ。国際機関でも、この問題については、盛んに議論しており、デジタル技術を使った調査や他者からの監視行為に対しては人権擁護活動をしている団体からも大きな懸念が示されている。監視行為に伴うプライバシー侵害の問題は、実はまだ国際的な協定が成立していないのが現状だ。

対象となった人物の名前まで特定できるほど、デジタルデータが出回っている状況で、犯罪者の捜査などを対象に使うことを、番組ではクローズアップしていたが、それ以外にも使われ方はいくらでもあると思う。プライバシーについての問題を深く掘り下げるのは難しかったかもしれないが、この課題について触れなかったことが不思議だった。

- 質の高い番組だ。デジタルジャーナリズム、オープンソースに基づく市民ジャーナリズムの最前線をグローバルな視点から紹介する有意義な番組だった。デジタル人材はサイバー安全保障のみならずジャーナリズムでも活躍できると思う。日本のデジタルジャーナリズムを後押しする効果があることが期待される。

なお、字幕のフォントについてだが、海外の番組は文字フォントがくっきりしているものが多いが、NHKの国際放送の番組は、例えば人物名などが、とてもシンプル

なフォントで表示されて、印象が薄くなり映像にも埋没して、読みづらいこともある。ぜひ字幕のデザインを工夫してほしい。

- 「Digital Detectives」というタイトルは、当初どういう内容なのかわからなかった。だが、番組の中で「ベリングキャット」などの解析手法が非常にわかりやすい形で解説されたので、具体的なイメージがよくつかめた。オープンソースから様々な真相に迫ることができるのは、率直に言って新鮮な驚きで非常に興味深く視聴した。

ほかに3点感じたことがある。1点目はジャーナリズムの手法の変貌だ。ジャーナリズムが真相に迫るといふ役割は不変だが、伝統的には足で稼ぐ地道な取材方法をとっていた。それがデジタル時代に大きな変貌を遂げつつあることはよく理解できた。海外の大手放送局や新聞社など、既存の報道機関までもがこういう体制を整えていることもわかった。この点について、NHKをはじめとした日本の報道機関は、現状はどうなっているのかが気になった。日本の報道機関も、「Digital Detectives」によって取材されたニュースをやがて放送することになるのだろうか。

2点目は、デジタル時代のジャーナリストの活動や成果をこの番組で見ると、やはり真相に迫る報道の力は、報道の自由が保証された民主主義の中で育まれるものなのだと思えた。

3点目は、番組名である「Digital Detectives」の手法のすごさは強調されていてよくわかったが、他の委員が指摘したようにプライバシーの問題など、課題や問題点、そういった影の部分も紹介されていれば、よりバランスが取れた番組になったかもしれない。

また、番組の最後で、次の世代を担う若い人の教育の必要性についても触れている点は、大変啓発的でよかった。日本国内でも放送したことは非常によかったと感じた。

- 大変見応えのある番組だった。特にナレーションが番組の雰囲気ととても合っていて、番組の作り方や盛り上げ方についても非常に上手だと思った。

課題は、情報の信頼性がどこまであるのかという点だ。インターネット上にフェイクのデータが仕込まれていたら、それを事実として認めてしまうという問題もあり得るのではないか。これはおそらくジャーナリズムの考え方と、アカデミズムの考え方との相違もあるかもしれない。例えば以前、アカデミズムの世界では、インターネット上にある情報は信じてはならないと考えられていた。文献として引用する場合でも、必ず図書館などで、原文を調べることで、インターネット上に流布している情報は、削除される可能性があると考えられていた。

またインターネット上の情報を信頼できるかどうかについては、アメリカと日本とでは感覚に違いもあると思う。アメリカでは、インターネット上の百科事典サイトに対する信頼が大きいことを知って非常に驚いた。日本では、間違いだらけで信じられないものだと考えられている。

- (NHK側) 身の危険にさらされてしまうのではないかと懸念する意見があったが、たとえば「ベリングキャット」のエリオット・ヒギンスさんは欧米ではすでに著名な方で、様々なメディアに出演しながら、世界中を飛び回っている。安全面ではいろいろ対策をとっていると聞いている。

日本の報道機関で、海外のように本格的な形でデジタル情報をもとに真相を追及する手法をとっているところはまだないと思う。近い将来、この手法を使って日本の問題を追及する番組を作れないかと考えている。

インターネット上の情報の信頼性についての指摘もあったが、彼らは日々フェイクニュースと闘っており、そのための技術開発にも取り組んできた。ただ、番組では時間の関係上、そこまで紹介できなかった。

プライバシー侵害については、例えばマレーシア航空機事件では、インターネットで公開されているオープンソースをもとに取材している。もちろん放送するにあたっては、顔や名前を出すことは慎重に検討しなければならない。番組では、個々の事例を紹介することを優先したため、触れなかった。いただいた貴重な意見は今後の参考にしたい。

2020年5月 国際放送番組審議会

2020年5月のNHK国際放送番組審議会（第669回）は19日（火）NHK放送センター（ウェブ会議）で11人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、「GLOBAL AGENDA」、「Asian View」、「Preventing the Spread of the New Coronavirus」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	河合祥一郎	(東京大学大学院総合文化研究科 教授)
副委員長	河野 雅治	(日本国政府代表・中東和平担当特使)
委員	岡田 亜弥	(名古屋大学大学院国際開発研究科 教授)
委員	鎌田由美子	(株 ONE・GLOCAL 代表取締役、クリエイティブ・ディレクター)
委員	阪田 恭代	(神田外語大学外国語学部 教授)
委員	佐藤可士和	(クリエイティブディレクター、(株)サムライ 代表取締役)
委員	佐藤たまき	(古生物学者、東京学芸大学教育学部 准教授)
委員	田中浩一郎	(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授 (一財)日本エネルギー経済研究所理事 兼 中東研究センター長)
委員	中曾 宏	(株大和総研 理事長)
委員	平子 裕志	(全日本空輸(株) 代表取締役社長)
委員	村上由美子	(経済協力開発機構 (OECD) 東京センター 所長)

(主な発言)

<最近の国際放送の動きについて>

- 新型コロナウイルス感染拡大の状況下で、NHKワールド JAPANのウェブサイトでは、ウイルスに関する情報をQ&A形式で提供していると説明があった。それは非常に重要なことだ。さらにそのQ&Aを多言語化しているとのことだが、続けていくのは大変な作業ではないか。

(NHK側) 1日1、2本の原稿を可能な範囲で作成している。4月後半からは、ラジオ第1放送で三宅民夫キャスターが司会を務める「マイあさ！」で非常に有益な情報が紹介されていたので、今はその原稿を活用している。

- 事態が刻々と変化しているので、常に最新の情報が求められていると思う。対応していくのは非常に大変だと思うが、ぜひ続けてもらいたい。

<「GLOBAL AGENDA」 World Lockdown: Battling the Pandemic

(4月11日(土) 10:10 ほか) について>

- 新型コロナウイルスの問題が今後どうなるかということは、世界が注目するテーマだ。時々刻々と変化するものが対象なので、誰が何を発言するかが非常に注目される。出演する専門家、有識者の選出や放送するタイミングが非常に重要な番組だ。

モデレーターの榎原美樹記者の歯切れのよい進行がよかった。質問の順番も、だんだん深くところに入って行き、最後は皆さんからメッセージを求めるという構成も、大変わかりやすかった。この番組は4人の有識者がわかりやすい発言をしていたのが印象的で、これは世界中の視聴者にとって、非常に有益な情報だったのではないかな。

日本の番組なのでパネリストに日本人を選ぶのはいいと思うが、日本以外は香港とイギリスの人だった。この選び方がいいかどうか。例えば台湾など、ウイルスの封じ込めに比較的早く成功したとされる国や地域から選ぶ方法もあったのではないかな。もしくは新型コロナウイルスの対策に苦心しているアメリカでは楽観派と悲観派の人がいると思うが、アメリカの人をパネリストに選べば、多角的な意見が聞けたのではないかな。パネリストの主張が皆同じに聞こえた点が少しもったいなく感じた。
- 複数の有識者が一方的に話して終わるのではなく、お互いに意見を交わす形の番組をもっと積極的に制作してほしい。

また、英語ネイティブではない人たちも見ることを前提として、英語の字幕を付けてほしい。英語ネイティブではない出演者の発音は聞きづらいこともある。英語の字幕を付ければ発言内容がもっと正確に伝わるのではないかな。
- モデレーターがとてもすばらしかった。パネリストもそれぞれすばらしい方だと思うが、表現のしかたは違っていても、主張の方向性があまりにも同じだった。もう少し意見の多様性が感じられる番組制作のしかたがあったと思う。

日本のパネリストと香港のパネリストは、それぞれ専門が感染症の分野で、すばらしい経歴を持っており、経験も豊富な方々だったが、残念ながら英語力という点においては、圧倒的に香港のパネリストの方がレベルが高かった。日本のパネリストも達人だったが、同じ内容を言っているにも関わらず、語彙の点で圧倒的なレベルの差を感じてしまう。
- 意見が一つの方向に集約していったとは感じたが、どこの国もロックダウンや外出自粛、そして免疫の有無を調べる点などについては、おそらく結論は一緒だろうから、同じ方向に行くのだろう。

今回はパネリスト全員が医療の専門家だったが、医療といっても感染症や検査手法など、専門分野は分かれているはずだ。同じ方向に議論が向かうのではなく、もう少し変化があってもよかったのではないかな。

放送時間の50分の中に、過去のスペイン風邪の話も入っていたのは非常に幅が広くてよかった。ただ、過去の失敗や解決策への言及はかなりあっさりとしており、もう少し深く触れてもよかったかもしれない。

- 新型コロナウイルスに関する報道番組には、数多くの専門家が出演している。この番組に出演した人たちは皆、第一線の専門家だと思うが、なぜこの4人にしたのか、ゲスト選出の方針のようなものがあれば、教えてほしい。

香港大学のガブリエル・レオン医学部長のコメントはよく整理されていて傾聴に値するコメントだった。ウイルスに対する免疫が社会に定着するまでは、抑制と緩和のサイクルを繰り返しながら長期間対応していくことが必要だと説明していた。このコメントから1か月後、まさに世界はそこに向かおうとしており、先見性があったと思う。レオン医学部長は専門である医療分野以外についても、例えばこの状況で浮き彫りになってきた格差の是正などが大きな課題であると発言していてまさにそのとおりだと思った。

各パネリストの主張が基本的に同じ方向を向いていたのはそのとおりだと思うが、違いもあった。例えばパンデミック制御のカギを握るワクチン開発までの期間について、東京大学医科学研究所感染症国際研究所の河岡義裕センター長は、副作用のない安全なものを作るには2～3年かかると言っていたが、WHOの進藤奈邦子シニアアドバイザーは1年～1年半と言っていた。専門家によってもこれだけの違いがあるのかと、大変興味深かった。

ぜひこの続編を制作してほしい。経済面では新型コロナウイルスによる影響をリーマンショックと比較する報道が多いが、単純に比較はできないかなり異質のものだと思う。リーマンショックは金融システムが崩壊して経済に打撃を与えたが、今回は順番が逆で、経済の危機が先行している。今後、企業倒産が続発して金融システムが持ちこたえられなくなると、もっと深刻で本格的な経済・金融危機に変異してしまうのではないか。

榎原記者が言っていたように、財政も金融ももともと限界以上の状態であるにも関わらず、人類共通の敵とも言えるウイルスとの戦いであるがゆえに、政府が大盤振る舞いすることが支持されている。しかし、これは将来的に国民にツゲが回るものだ。だからそれを納得できるものにするためにも、効果的な政策を評価する目と、ポストコロナの経済と社会のあり方についてビジョンが必要だと考える。この点を番組で取り上げるべきだと思う。

いずれにしても日本は過去30年間、さまざまな経済危機だけではなく自然災害を経験してきた。経験から得た教訓を新型コロナウイルスに挑む世界にどう生かせるか。そこがポイントだと思うし、そうした視点を持つことによって日本の国際放送には、ほかにはできない形の情報発信ができるのではないか。

- 新型コロナウイルスについての報道が急増し、「新型コロナウイルス」という言葉が入っていないニュースがほとんどない状況になっている。

新型コロナウイルスの感染拡大が一段落した後に番組制作者の役割は何なのかと考えると、1つは今回の「GLOBAL AGENDA」のようなディスカッションの番組やドキュメンタリー番組といったものが主流になっていくのではないか。この「GLOBAL AGENDA」は4月11日に放送されたものだが、1か月以上たっても見ても価値が減じていないと感じる。とても普遍的で良質な番組だ。何か月たっても価値のあるこのような番組を作るべきだ。

この番組の良かった点は、第1に、新型コロナウイルスをめぐってはさまざまな流

言飛語や、人の耳目を引くコメントが時折表れては、人に不安を与える。しかしこの番組は科学的な裏付けのある議論を展開しており、また歴史的な視点からの検証もあり、事実を重んじた議論で価値があると感じた。

第2に、今回のパネリストは極端に楽観も悲観もしておらず、科学的知見に則った意見を冷静に述べていた。最後は人々の連帯の重要性を指摘しており大変印象的だった。

このような状況は今後も続くと思うが、長期間価値が変わらないドキュメンタリー番組やディスカッション番組こそがわれわれの心のよりどころになるのではと思う。

- この番組が放送された4月11日時点で、世界中の人々が最も関心を持っているテーマを専門的見地からの非常に深い議論がわかりやすく展開されていてとてもよかった。

しかし、50分の放送時間は少し長く感じた。それには理由が2つある。

1つは、膨大な情報や新しい知見が提供されはじめた5月時点でこの番組を見ると、あまり新しいと思える情報はなく、ニュースや情報の賞味期限について考えた。

2つ目の理由は、番組のスタイルにあると思う。新型コロナウイルス対策でパネリストがリモート出演することは、ソーシャルディスタンスに配慮したやり方だとは感じるが、他方、以前見た「GLOBAL AGENDA」ではパネリストが丁々発止と討論していた。そうしたスタイルに比べると、今回は、若干、単調になりがちだ。もっと視覚に訴える映像やフリップを途中で挿入するなどすれば、視聴者を引きつけやすかったのではないかな。

今後もこの「GLOBAL AGENDA」で、例えばワクチンの開発状況や、各国がこの問題に取り組む手法を比較しながら、それぞれの長所と短所を取り上げてほしい。日本ではロックダウンは行われず、緊急事態宣言を出すのも遅かったと感じたが、死亡者数はあまり多くない。その理由に諸外国が関心を示していると聞いている。日本と他国の戦略の違いと結果の考察や、グローバリゼーションとパンデミックとの関係など、もう少し深掘りしながら、継続的に取り上げてほしい。

医学の専門家である香港のパネリストが、グローバリゼーションとパンデミックとの関係など、経済的な観点からも話していたが、そういう分野に話が及ぶのであれば、やはり経済の専門家もパネリストに加えるべきだと思った。

- 番組の制作自体が困難な状況になっていることを考えると、NHKをはじめ報道やテレビ制作に携わっている人は本当に大変な苦勞をしていると思う。例えばトーク番組なら今後どう制作していくべきか、ここで改めて考えなければならない。

モデレーターだけがスタジオにいて、パネリストは並べられたモニターを通して番組に出演する演出も、おそらく2、3年後には「昔、こんなことをやっていたよね」と言いたくなるほど相当アナクロなものに見える時代が来ると思う。今後、撮影ができない、人と会えないという作り手の制約を視聴者に感じさせないようにするべきだと思う。討論の内容がきちんと理解できる見せ方をどう工夫していくべきか、NHKが放送業界を引っ張って行ってほしいと思う。

生放送では話の内容にあわせて即座にテロップや字幕を表示するのは難しいかもしれないが、編集してから放送するのであれば、例えば重要なキーワードを美しいフォ

ントで提示するなど、様々な見せ方が考えられるのではないかと。

- パネリストによって音声や画質にばらつきはあったものの、比較的是っきり話しており、顔や画面の大きさが揃っていたからだと思うが、普通にテーブルを囲んだディスカッションのような感じで、違和感なく見ることができた。

専門的な話が多く、とても勉強になる番組だと感じた。同時に、パネリストの顔を見ながらひたすら議論を聴くだけで、途中で疲れてしまい集中力が切れがちになった。もう少し関連する画像を差し挟んだり、専門用語は字幕などを使って説明したりと、工夫したほうが理解の助けになったのではないかと。

出演者の名前のローマ字表記が気になった。NHKの放送では日本人の名前をローマ字で表記する際は、姓を先に書くように変更したそうだが、イギリスと香港の方は名前が先で姓が後に表記されていた。日本人の名前はこの番組を視聴する外国人から見ると、おそらくどちらが姓か名か、わからないのではないかと。モデレーターの方が名字に敬称をつけて呼びかけていたので、どちらが姓かはある程度把握はできたが、視聴者サービスの観点から、どちらが姓であるかわかる表記があればいいと感じた。

- 専門性の高い有識者を集めた点は評価に値する。科学や医学の常識を無視したある種の情報が頻繁に発信されているので、正しい情報を伝えることが極めて重要ではないかと思って見た。

以前視聴した「GLOBAL AGENDA」はパネリストが全員男性だった。今回は、もちろん専門性を重視することが前提だと思うが、パネリストに女性いた点はよかった。

- 榎原記者の進行がすばらしかった。パネリスト4人の選出がとてもよかった理由は、それぞれにきちんとした主張があり、限られた時間の中で凝縮したメッセージをひとつも無駄のない形で伝えられていたからだ。これは本当に日本が誇る国際放送の1つのモデルになっていると確信した。次は経済をテーマに番組を続けてもらいたい。

(NHK側) NHKでは日本人の名前をローマ字で表記する際、公文書などの表記も踏まえて、3月30日から基本的に姓・名の順にしている。ただし出演者本人の意向も考慮しており、強制することはしていない。

この番組は4月7日に収録し、4月11日に放送した。アメリカの約350あるPBS局に放送を提供しているAPT (American Public Television) の担当者がこの番組を見て放送することを決めたと聞いている。番組は多くのPBS局のメインチャンネルで放送され、いち早くアメリカの視聴者にも最新の情報を発信することができた。

(NHK側) 委員の疑問点は3点あったかと思う。1つはパネリストの選出方法と意見が同じ方向を向いてしまった点について。2つ目は内容について。そして3つ目は今後の予定についてだ。

パネリストの選出は、企画段階では「インフォデミック (情報の感染拡大)」について討論できないかと考えていた。今回パネリストとして出演

していたイギリスのノッティンガム・トレント大学のディングウォール教授はその分野の専門家で、様々なデマが飛び交う中で、人はどのように対応していくのかに関して発言していただきたいと考えた。ところが事態はどんどん深刻化し、ロックダウンへの対応を議論する段階へと進んできた。そのため、議論のテーマを転換することにした。

転換後の人選に時間がかかったため、結果的に意見が重なる出演者となってしまったかもしれない。人選にあたっては男女比も考慮し、討論番組にふさわしい異なる主張をもつ方に出演いただきたいと毎回考えている。短い時間の中でも調整を続ける努力をしていきたい。

内容に関しては、いろいろな国の方針の違いをもっと率直に討論できたらいいと感じている。引き続き、この新型コロナウイルスをテーマにして番組を作ることを考えている。リモート出演で討論すると、モデレーターとの1対1の対応で終わってしまう場合も出てくるが、モデレーターがもう少しパネリストの間に入っていき、討論に導く役割を果たすことができればよいと思う。

今後は、グローバリゼーションとパンデミックとの関係、経済への影響、拡大した格差への対応、外出自粛の中で、変わりつつある生活様式などについて、もっと専門家の意見を紹介できればと考えている。

発言内容を字幕表示する点については工夫していきたい。

(NHK側) 字幕について補足すると、この番組はNHKワールド JAPANのホームページで、1年間VODで視聴可能で英語の字幕を表示できる機能を付けている。また番組内容を書き起こしたテキストを掲載している。

(NHK側) この番組はアメリカのPBS各局でも放送や配信されているが、字幕の表示・非表示を切り替えられるクローズドキャプションの形で字幕を出している。

< 「Asian View」

(ラジオ国際放送 週間ニュース番組 4月3日(金) 18:30 ほか)

「Preventing the Spread of the New Coronavirus」

(ラジオ国際放送 ミニ番組 4月29日(水) 13:40 ほか) について>

○ 「Asian View」はラジオの番組なので、映像がなくても理解できるテーマが求められていると思う。今回、ニュースとインタビューを組み合わせで5分とコンパクトに構成していた。

「Preventing the Spread of the New Coronavirus」は、感染経路をいくつか説明していて、そのひとつとしてマイクロ飛沫感染を取り上げていた。これをラジオの音声だけで解説していたが、まるでどこかに映像があってそれを見ながら解説をしているかのような感じで、リスナーは若干とまどいを覚えたのではないかと。

感染症の専門家である日本感染症学会の舘田一博理事長の解説を英語に翻訳したものを、ただナレーターが棒読みしている感じがした。また、少し長めの音楽がところどころに入って、その間の取り方に違和感があった。4月29日の放送だが、だいたいが知っているような内容で、この時点でマイクロ飛沫感染を説明するのは、もはや新しさが無いのではないかと。

- 緊急事態宣言下でラジオの聞き方が変わってきているのではないかと思う。日本では車の中でラジオを聞くことが多いと思うが、今はスマートスピーカーを持っている人もいないのではないかと思う。

スマートスピーカーに「NHKラジオのニュースを聞かせて」と言うとNHKラジオの英語ニュースが流れた。それは素晴らしいことだ。しかし「Asian View」や「Preventing the Spread of the New Coronavirus」と個別の番組名を言っても出てこなかった。人々の生活様式が変わってきており、ラジオの聞き方も変わってきている中で、どのようにNHKの英語のラジオ番組を多くの人々に聞いてもらえるかを考えないといけないタイミングにあるのではないかと。

- 「Asian View」は全く違和感がなかったが、「Preventing the Spread of the New Coronavirus」は、画像がないと聞いていてもわかりづらかった。英語力の高くない人が聞いたときに、視覚的要素があるかないかで、内容の理解度は大きく変わる。ラジオに向いているテーマと不向きなテーマがあるのではないかと。

- 「Asian View」は海外のリスナーを念頭にコンパクトに大変わかりやすく出来事をまとめていると思った。国際感染症センターの大曲貴夫センター長が語る論点も、なぜ日本の感染者数が他国に比べて少ないのか、あるいは日本における治療薬の開発状況はどうなのかなど、多くの人々が知りたい点に絞っていて非常に興味が持てた。

「Preventing the Spread of the New Coronavirus」は、感染防止にとっても実践的で役に立つ情報提供をしている。新しい感染経路として、空中を20分間も浮遊している0.01ミリ以下のマイクロ飛沫があることは、多くの人が認識をしておくべきことではないか。そしてこの感染経路を防ぐため、近距離での対面や対話の回避、換気、マスクの着用の必要性を論理的に説明していて役に立った。

- 非常に実践的な番組だった。特に「Preventing the Spread of the New Coronavirus」は、マイクロ飛沫への対策について日常生活で役に立つような情報を短時間で紹介していて、価値のある内容だ。実践的な情報は常に取り上げていくべきだ。これだけ日々新型コロナウイルスに関する報道があっても、これまで知らなかったような情報をはじめて知る人は必ずいる。こういう番組は続けていくべきだ。

「Asian View」は、日本人出演者の英語が聞き取りにくかった。また、若干抑制的な発言をしている印象を受けた。これは少し残念だ。政府の見解においても日本のやっていることは世界にアピールできるようなものもあるので、そこは強い姿勢を示してもらいたいと思った。

- 「Asian View」は短い時間で非常に効果的に質疑応答が行われていた。特に多く

の人が関心を持っているPCR検査の実施が日本では少ない状況をわかりやすく説明
してよかった。

「Preventing the Spread of the New Coronavirus」の飛沫感染については、以前、NHKの番組の実験で飛沫がどのように飛ぶかを見ていたため、映像がないラジオ番組でも理解できた。こうした情報はぜひ多言語に翻訳して多くの国に伝える
るといいのではないか。

○ 今は情報への接し方が大きく変わり、今後は視聴者の情報の取り方も変わっていく
と思う。だから、まずはこれまでのやり方を疑ってかかり、番組名の付け方や、どの
ようにラジオが聞かれているのかなどを考えないと、せっかくいい番組を作っても聞
いてもらえないのではないか。

○ 「Asian View」も、「Preventing the Spread of the New Coronavirus」
も、映像がないのに、これほど情報が伝わるのかと感心した。

少し気になったのが、「Asian View」の後半のインタビューで大曲センター長が
話しているとき、途中で人の声が少し入っていた点だ。ラジオが混線したのかと気にな
った。原因がわかっているのであれば教えてほしい。

○ 「Asian View」は映像がないぶん、音声に非常に集中して聞くことができ、テン
ポも私には合っていて聞きやすかった。放送当時はもちろんこれが最新情報、あるい
は不可欠な情報だったと思うが、どのような頻度で、あるいはどのようなタイミング
でこういった情報発信を更新しているのか。その方針があるなら教えてほしい。

「Preventing the Spread of the New Coronavirus」は、非常にNHKら
しい優れた情報番組だ。おそらくマイクロ飛沫について警鐘を鳴らした世界でも最初
期の番組だと思う。国内放送のテレビ番組でも見ており、知人たちの間でもSNSで
かなり広くシェアされていた。それだけ評価されていたのだと思う。確かに映像がない
ので理解するのがやや大変かもしれないが、意外と気が付いていないところになん
か高いリスクが潜んでいることを知らせていた。その内容は評価したい。

○ 5分間でこれだけ充実した情報を伝えたのはとてもよかった。ただ、例えばPCR
検査の実施数が少ないことに関する答えはあれでよかったのかと気になっている。そ
れから番組中に別の人の声が入って来てしまった点は私も気になった。生放送では仕
方ないのかもしれないが、少し残念だ。

「Asian View」は音楽が少し長すぎたのではないか。メッセージが重要なだけに、
あまり必要でない音楽はできるだけ短くしたほうが、集中度が高まるのではないか。

(NHK側) 欧米ではスマートスピーカーが普及していることもあり、“音声サービ
ス革命”ということも言われている。それを踏まえて、これまでの短波中
心のラジオサービスに加え、よりリスナーに広く届ける方策がないかと考
え、去年11月からNHKはNPR(非営利・公共のラジオネットワーク)
との連携をはじめた。テレビで関係の深いPBSの中には姉妹局として
NPRを持っているところもある。NPRの担当者と直接打ち合わせをし

ながらこういう形を見つけ出していった。スマートスピーカーなどを介して、さまざまな音声ニーズにこたえる形のサービスをさらに進められないかと考えている。

(NHK側) まず「Asian View」だが、この4月3日の回は大曲センター長に時間の合間をいただいて、放送直前に録音しすぐに放送する、つまりほぼ生放送に近い形で収録して放送したものだ。ほかの人の声が入ってしまったのは、キャスターやディレクターの声が入ってしまったのだろう。指摘は今後の番組制作の参考にする。

「Preventing the Spread of the New Coronavirus」は、4月29日時点で新しい内容ではないという指摘があったが、海外のリスナーに向けて、マイクロ飛沫を説明したことはあまりないのではないかと考え放送した。

今後どのように番組を制作し、情報を更新していくかという点について言うと、ラジオスタジオはとても小さいので、番組収録をふつうに行うと、いわゆる“3密”状態になってしまうという課題があり、スタッフの人数をどう減らしながら番組を制作するかについて、試行錯誤している最中だ。

「Asian View」は今後、基本的にはポッドキャストをするとスマートスピーカーにそのまま流れていく仕組みにしていきたい。「Asian View」と声で指示すると番組を聞くことができるようにしたい。

「Preventing the Spread of the New Coronavirus」は、権利処理上の課題があるので、すぐにポッドキャストやスマートスピーカーでの配信に対応するのは難しいが、今後、方法がないか検討を続けたい。また多言語での展開も考えたいと思っている。

2020年4月 国際放送番組審議会

2020年4月のNHK国際放送番組審議会（第668回）は21日（火）NHK放送センター（ウェブ会議）で、11人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、「Barakan Discovers TOHOKU: The Lost and the Living」、「FACES How I survived being bullied」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	河合祥一郎	(東京大学大学院総合文化研究科 教授)
副委員長	河野 雅治	(日本国政府代表・中東和平担当特使)
委員	岡田 亜弥	(名古屋大学大学院国際開発研究科 教授)
委員	鎌田由美子	(株 ONE・GLOCAL 代表取締役、クリエイティブ・ディレクター)
委員	阪田 恭代	(神田外語大学外国語学部 教授)
委員	佐藤可土和	(クリエイティブディレクター、(株)サムライ 代表取締役)
委員	佐藤たまき	(古生物学者、東京学芸大学教育学部 准教授)
委員	田中浩一郎	(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授、 (一財)日本エネルギー経済研究所理事 兼 中東研究センター長)
委員	中曾 宏	(株大和総研 理事長)
委員	平子 裕志	(全日本空輸(株) 代表取締役社長)
委員	村上由美子	(経済協力開発機構 (OECD) 東京センター 所長)

(主な発言)

<最近の国際放送の動きについて>

- ニュースで、緊急事態宣言下で継続されるサービスを報じる際、「銀行サービス」という用語を用いることが多かったかと思うが、これは「金融サービス」としてほしい。緊急事態宣言のもとにおいても、基本インフラとして金融サービスは継続的に提供され続けなければならない、その場合の金融サービスは銀行だけではない。現金を輸送する人、保険、証券取引所、資産運用、株や為替、債券のディーリングをする人たちなどは実際に出勤をしなくてはならない人たちだ。
- 日本のメディアは、特にニュース番組など何人かが画面に映る場合、ほかの国に比べると配慮がなさ過ぎると思う。明らかに3密状態のスタジオに出演者が並んでいることがある。
NHKはそういうことに関して率先してモデルになるよう社会から期待されていると思う。今後も、パンデミックやほかの危機的な状況を迎えたときに、どういうメッ

セージをどういう形で伝えるか、メディアの姿勢を示してほしい。

- 日本語は非常にわかりづらいところがあり、主語と述語がつながっていないことがある。政府の新型コロナウイルスの話も修飾語が多く、日本で働く外国人の人々が、細かい話になるとわからない部分もあるかもしれない。国際放送を通じて、政府の様々な施策をわかりやすく伝えることも、NHKの仕事としてますます重要になってくるだろう。
- 日本における外国人への情報提供は軽視されがちなので、英語以外の言語でも情報発信に取り組んでいることを高く評価したい。
多言語番組は教育コンテンツとして活用できるようにしてほしいという社会的なニーズがある。可能な限り、NHKの番組はネットでもアクセス可能な形にしていきたい。

< 「Barakan Discovers TOHOKU: The Lost and the Living」

(3月8日(日) 8:10 ほか) について>

- 大変よい番組だった。この番組から感じたことは、死者のことを忘れなければその死者は残された者の中で共に生き続け、また残された者が生を全うする上で死者との思い出が力となることだ。東北の人々の間に根づいている死生観だと思った。番組はそのような死生観が育まれた背景を番組ナビゲーターのピーター・バラカンさんが東北を実際に訪れて探っていく構成だが、非常に理解しやすい構成だった。はじまりと終わりに東日本大震災のエピソードが紹介されていた。番組冒頭のタクシー運転手が話す幽霊の話は、視聴者を効果的に番組に引き込むのではないかと感じた。また最後に震災で家族を失った人の言葉で締めくくられており胸を打った。東北の人々の死生観が今日にも脈々と継承されていることが感じられた。
番組の中盤には、遠野地方のシーンが入っていたが、遠野は民話の里として非常に有名だが、遠野に伝わるかっぱが、宝暦の大飢饉で間引かれた赤ちゃんを忘れないために生まれた存在であったという話は、非常に悲しい背景だと驚いた。
なぜ東北でこのような死生観が生まれたのか。番組の中で東北学院大学の金菱清教授が、阪神・淡路大震災のときには幽霊が出たという話はなかったと発言していた。その違いは、美しくも厳しい東北の自然と関係があるのだろうか。東日本大震災の後、お見舞いのために三陸沿岸の被災地をまわった際、妻を震災で亡くして遺体も見つからない方がいたが、同僚たちとの会話で、いまごろ奥さんはアメリカをゆっくり旅しているよ、とか、飲み過ぎないようにと奥さんは心配してるよと、まるで生きているかのように語っていた。その会話に私はどう加わるべきか、当惑した覚えがあるが、今回の番組を見て、あの時の会話に東北の死生観が反映されていたのだと初めてわかったような気がした。
- 映像が非常に美しく、また内容も深かった。毎年3月には東日本大震災から何年目という節目の番組が作られるが、これまでの番組とは、かなり視点の違った番組だと

感銘を受けた。番組全体の感想として、映像の美しさ、内容の構成、そして江戸時代までさかのぼった東北の厳しい状況を描いていた点を高く評価したい。

しかし公共放送が心霊現象を番組で扱うことが、外国でどう受け止められるのかと、やや疑問に感じた。

- 映像もすばらしくきれいで、とてもおもしろかった。

NHKでこのような幽霊の話を取ったことにまず驚いた。基本的にはとてもいい番組だったと思う。日本のこうした死生観や、津軽地方にある川倉賽の河原地蔵尊のシーンは、海外の人だけではなく、日本人が見ても驚く映像で大きなインパクトを感じた。

新型コロナウイルス感染拡大の時期に死生観を取った番組を見たので様々なことを考えたが、こういう切り口で日本の文化を紹介するのは非常に興味深い試みだ。

子どもの間引きの歴史と関係しているという非常にシリアスな話が、かっぱという妖怪を生み、近年ではとてもかわいいキャラクターに昇華されている。それはある意味、非常に日本的だと思う。例えば間引きされた子どもの霊ではないかと言われていた座敷童子も非常にかわいい妖怪として扱われている。「かわいい」と「こわい」の紙一重、表裏一体な点も日本の文化として非常におもしろいと思う。それもあわせて紹介すれば、番組がより深まったのではないか。

- 単なるエピソードの紹介とそれを聞いた感想だけではなく、歴史的な背景、あるいは民俗学の観点も取り入れて解釈していたのでとても見応えがあった。

- すばらしい番組だ。日本をよく知るバラカンさんが4つのエピソードで東北を調べているが、自然の映像がすごく美しく、BGMや効果音も非常に印象に残った。この4つのエピソードがうまく連結して、1つのすばらしいストーリーができています。最初にタクシー運転手が語る幽霊の話があり、ここで東北の人たちが死者に寄り添う風習があるのはなぜかと疑問をまず持つ。そこから津軽、遠野、宮城とたどっていく。どのエピソードでも昔の東北地方の子ども、女性、貧困者など社会的弱者の死後の幸せを祈る儀式とか、あるいは現世で逆にそういう人たちから安らぎを得ることなど、生と死がしっかりつながっていることがわかる。

番組に登場する金菱教授は、幽霊の存在を信じていなかったが、東日本大震災後9年間の研究の結果として、生存者の視点で考えがちな復興問題を、亡くなった人たちの存在にも寄り添って見ていた点が非常に印象的だった。最後に金菱教授が出てきて番組全体が引き締まったのではないか。

ただ、ほかの取材相手と異なり、金菱教授のインタビューだけが英語字幕ではなく吹き替えになっていた。統一していないのは何か意図があるのか。

- まず映像と音楽がすばらしかった。特にオープニングの四季を表す映像は非常に芸術的ですばらしく、音楽も非常に効果的だった。バラカンさんのレポートとナレーションも非常によかったです。長く日本に住んで日本文化への理解が深いことはもちろんだが、バラカンさんの落ち着いた人柄や、インタビューシーンにも相手に寄り添う姿勢がよくあらわれていた。

タクシー運転手の幽霊話も、NHKで取り上げるには少し疑問に思うだろうが、バラカンさんが非常に落ち着いたやりとりをしているので、その後のエピソードにうまくつながっていたのではないかと思う。

最後に登場した家族を亡くした方の話には心を打たれ、思わずもらい泣きしてしまった。また3月に放送したのはタイムリーで、非常にいい番組だった。

- 意欲的な番組として高く評価する。3.11にちなんだ死者に対する鎮魂の番組として理解したが、日本人としても、驚きとともに発見と感動があった。ただし、海外向けの放送であれば、東北のストーリーの特殊性のみならず、グローバルに共有できる普遍性にもう少し配慮されていればよかった。例えば、番組の導入部で、他国の鎮魂のストーリーを紹介して、日本のストーリーに入ると視聴者ももっと共感できると思う。
- とても楽しく感銘を受けながら見た。今回の死後の世界の概念そのものは特に東北や日本特有のものではない。死後の世界に関するさまざまなしきたりや儀式、お地蔵さんのような存在は世界中にある。この番組を日本語のできない外国人やあまり日本に関する知識もない海外の視聴者が見ることを想定するならば、死後の世界を東北ではこういうふうに見ているのだとか、その背景にある宗教観や文化、あるいはこのような歴史があったのだと、もう少し踏み込んで説明したほうがよい。そうすれば視聴者に景色がきれいだとか、かわいそうだという表面的な感想に終始せず、もう少し日本に対する興味や知識を深めてもらえる内容にできたのではないかと思う。
- 津軽のパートでは、2,000体以上のお地蔵さんの数だけではなく、その表情にも圧倒された。人形堂などよく取材されていると感じた。取材者の力量がよく表れている番組だった。シリアスだが日本文化を非常にわかりやすく伝えている番組でよかった。世の中では新型コロナウイルスのように、想像もつかないことが起こる場合がある。論理や科学が及ばないものを信じることや、人と人とのつながりの大切さを訴えることは今の時代に合っていると感じた。
- 生と死の問題はコロナ禍の中で実際に起こっていることで、非常に時宜を得た番組だと感じた。大変すばらしい秀逸なドキュメンタリーだ。

生きている人が死者と身近な関係にあったり、対話ができたり、あるいはそこから学ぶことができたりなど、東北の風土は他の地域の日本人にもなかなかわからないことだと思うので、大変大きな発見があった。すばらしい番組で、東北地方を知る非常に重要な番組だった。

東北の人はつらい経験をされたため、口が重くなる方もいると思うが、バラカンさんが出演したからこそ、比較的話してくれたのではないかと思う。そこが、この番組のカギのひとつだったのではないか。出演者の人選がよかったと思う。
- バラカンさんは非常によいキャラクターで、キャスティングが成功していたと思う。

(NHK側) この番組は年間2本制作しており、昨年の夏は、「Barakan Discovers TOKYO」を放送した。

震災の直後から、宮城県石巻市や岩手県大槌町など各地で幽霊を見たという人の話があり、バラカンさん自身、大変興味を持っていた。東北がどう復興していくのかについて、あえて幽霊の話の切り口にしながら日本人の死生観や、東北の歴史的背景を見ていきたいと思って取材した。

幽霊話や死生観はどここの国や地域の文化でも見られることだが、日本ならではのの特徴もある。海外のモニター視聴者からも日本独特の感性だと感じたという反応があった。

(NHK側) 幽霊の目撃談からあえて番組をスタートさせてようと思った決め手は2つあった。

1つは、外国の新聞社の東京支局長がこの心霊現象について書いた「津波の霊たち」という本だ。ノンフィクション作品としてイギリスで非常に大きな賞を取っている。それゆえに海外の人たちにもこの心霊現象は非常に関心が高いテーマだと感じた。

もう1つは、番組にも登場してもらった金菱教授との出会いだ。金菱教授は関西の出身だが、東北で生者と死者が共にあるとする考え方に非常に驚いた。教授自身は幽霊を信じていないと明言しつつも、震災直後から「震災学」という研究プロジェクトを立ち上げ、非常に真摯（しんし）に10年近く研究を続けている。金菱教授の協力も得られたので、東北における生者と死者の関係性を探っていけるのではないかと考えた。

なぜ阪神・淡路大震災の時には、幽霊の目撃談があまりなく東北であったのかは明確にはわからない。様々な方の話を聞くと、おそらく東北の風土の厳しさゆえ歴史的に不作や飢饉に見舞われることがあり、死がある程度身近な存在だったことも影響しているのではないだろうか。死者の数も相対的に多かったので、亡くなった人たちの力を借りて生き抜くという文化が育まれたのではないかと取材を通じて感じた。

なぜ、金菱教授だけ吹き替えになっているのかという質問だが、このシリーズは4本目で、これまでの3本では出演者の方は基本的に吹き替えにしていた。しかし今回は、東北の人たちの語り口や声の感触も重要な情報ではないかと考えた。そこで金菱教授のインタビューはわかりやすいように従来どおり吹き替えにしたが、東北の方たちの発言字幕にした。

< 「FACES How I survived being bullied」

#1、#2、#12、#35、#41、#42

(3月9日(月)～3月24日(火)ほか)について>

- いじめがこれだけ世界中に蔓延していることに驚かされた。いったい何が原因でいじめが生じるのか。過去の世代はどうだったのかといった率直な疑問が次々に湧いてきた。

この番組は、いじめられた子どもたちが同じような境遇にある子どもたちに希望を届けるのが目的だと思う。今回視聴した6本では、語られる体験もさまざま。ある日本人女性はいじめをソフトボールクラブの仲間と克服しただけでなく、現在は小学校教諭となり、過去の経験を生かして子どもに寄り添い手を差し伸べていた。非常に建設的で一貫した姿勢に強い感銘を受けた。

幅広い経験を共有することで救われる子どもは多いと思う。この番組は海外の公共放送との共同プロジェクトだと説明を受けたが、今回、視聴した6本以外には、何本くらい制作したのか。また、希望を届けるという目的が、どの程度この番組によって達成されているのか。

セルビア人女性の回では、白い背景と重なって字幕が判読しづらかった。画面に集中できず、話が追えなかった。特に視聴者が外国人である場合、メッセージを的確に伝えるための工夫が必要だと感じた。

- (NHK側) この番組はいじめに対して世界の放送局が手を組んで何かできないかと考えてスタートした。現在、日本を含め、12の国と地域から放送局が参加し、56本のエピソードが集まっている。

- 50本あまり制作されたそうだが、プロジェクトに参加した放送局がどのような基準で取材対象を決めているのか。放送局間での情報の共有などはあるのか。

- 取り組みとしては非常に意味がある素晴らしいことだと思った。いじめについて語るができる場ができたこと自体が素晴らしい。番組のウェブサイトで、ほかの放送回も見したが、それぞれの話には非常に聞き入るものがあった。

- いじめは国や地域を問わず普遍的な問題であることがわかり、ショックを受けた。いじめを取り上げる番組は重い内容になることが多いので、いじめられている側の人もしじめる側の人も見ないことが多いと思う。だがこの番組は短時間なので、何かの番組を見るついでに見てもらうことで、いじめられている人に対する助けとなったり、いじめる側の人に対する注意喚起、あるいはそれを横で見ている人たちの意識を高めたりするなどの役割も果たせるのではないかと思う。

- 6つのエピソードをまとめて見たので、様々な理由でいじめが発生するのだとわかったが、視聴者のなかには1つのエピソードしか見ないという場合もあると思う。いじめの原因がわかりにくいエピソードもあったので少し気になった。ただし、どのエピソードでも、最後には人のために尽くしたり、自分に自信をつけたりといった手立てでいじめから立ち直った話が盛り込まれていて、メッセージは効果的に伝わったのではないか。

- 非常にいい番組だと思った。いじめを克服した若者が自分の言葉でどのようにいじ

めを克服したかについて語っており、前向きなメッセージを送っていた。日本だけでなく、東南アジアでもいじめによる若者の鬱や自殺の割合が増えている。いじめを克服した人々が、悩んでいる若い世代に向けてメッセージを発するのは非常に重要だ。

この国際共同プロジェクトは、今後さらに多くの国と連携していく予定はあるのか。

- このような短時間の番組をまとめて制作することは、ネット時代において非常に効果的だ。ぜひ今後も取り組んでほしい。

今後についてだが、こういう普遍的な問題について、例えばSDGsとも関連づけて、さまざまな国の人々と協力していくべきだと思う。

- さまざまな国で共通するいじめ問題に直面した人たちが克服者として登場する、意味のある番組だと思う。しかし今後もこのような形で番組を作るのであれば、サイバーいじめの問題も絶対扱うべきだと思う。

学校でも、サイバーいじめについて対策をいろいろと検討しているようだ。子どもたちはサイバーいじめを日常の問題として抱えているが、今回はあまりその部分には触れられていなかった。

- とてもインパクトが強いすばらしい番組だった。1本だけでも強いメッセージ性が伝わってくる。番組の短さゆえの強みをもっとさまざまところで利用できるのではないか。その一方で、いじめをつらく感じて死にたいとまで考える子どもが、はたしてこの番組を見るだろうか、見る機会が提供されるのだろうかと考えた。そうであれば、視聴ターゲットが異なってくるのではないか。いじめられている子ども自身が見てくれればいいが、おそらく見ないだろうし、見る環境も気力もないかもしれない。その子たち自身ではなく、その周りの人たちがこれを見て、次の行動につなげてもらうことのほうが期待できる。そういうねらいの番組なのではないかと思った。

新型コロナウイルスによってアジア人への差別や偏見が世界各地で起こっている。それを考えながらこの番組を見ると、大人は何に対していじめを始めるのかがわかる。この番組では子どものいじめにスポットを当てているが、実は子どもたちが見ているのは大人の背中なのだというメッセージをもっと強く出してもいいのではないか。

- とてもよい番組で、これを見て励まされる人は多いと思う。差別と偏見の問題は、このコロナ禍の中で起こっていることでもありタイムリーだ。

この番組によっていじめられている若者たちが励まされることも重要だが、むしろそういういじめとは無関係な、あるいは無意識、無関心な人たちに自覚を促す効果がある番組だと思う。いじめとは無関係な立場にいる多くの人たちが、いじめについて学ぶところに、この番組の重要性があると思う。

(NHK側) 国内放送ではいじめ問題に長年取り組んできた。Eテレには「いじめをノックアウト」プロジェクトがあり、そこで取材したインタビューが非常に優れたものだったので、これを世界に向けても発信していきたいと考えて英語化した。NHKが旗を振り、できるだけ多くの国や地域の公共放送に参加してもらうことを考えた。いじめられている人だけでなく、自分は

いじめとは無関係だと思っている人たちにも見てもらいたいと考えている。

去年、NHKが主催する教育コンテンツの国際コンクール「日本賞」で特別賞を受賞するなど、外国の審査員からも高い評価を得た。

(NHK側) この番組は、企画が立ち上がった当初からABU（アジア太平洋放送連合）、EBU（欧州放送連合）、南米の放送局連合であるTALと協力してきた。どのような演出で、どのくらいのサイズの番組を制作すれば、ターゲットにリーチできるかなど、海外の放送局のプロデューサーたちと相談しながら制作した。ABUやEBUを通じて参加局を募っている。ただし、それぞれの放送局の事情やタイミングもある。引き続きさまざまな国や地域の放送局に声をかけていくつもりだ。

また現在ユネスコなどと連携する道も探っている。このように世界中の放送局が協力して進めているプロジェクトなので、いじめの被害を減らすために、この番組をさらに活用していきたい。